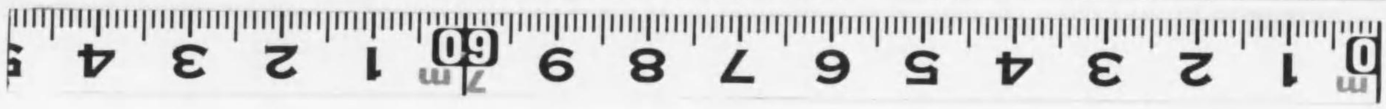
F13-0966-37ウ
1200500763329
F13
0·966
7



F13
0·966
37

洋車の大將

尾崎士郎著

昭和十五年十二月

903
256

順序	
洋車の大將	三
客愁	一九
生理	四九
記憶	七七
平俗	八七
石切風來	一一三
浪曼的時代一面	一二五
粹な中尉さん	一三七
雁	一五三
引退前	一七三
夜汽車	一九五
死人に口あり	二一三
蛇足	二二五
夕月抄	二六三
跋	三五五

洋車（ヤンチョ）の大將

裝幀　茨木猪之吉
背文字・扉文字　著者

洋車の大將

北京の街は今、日本人でうづまつてゐる。どこを歩いても日本人の顔にぶつからぬところはない。人間ではなくて街そのものが日本人の相貌に變つてゐるのだ。もつとも日本人の多いのは東單牌路から哈徳門一帯で、縦横につらなつてゐる露地の中は日暮がたになるともうネオンが輝き、蓄音機のメロデーが騒音の中から湧くやうに流れてくる。街の表情はすべて銀座裏か新宿裏といふかんじで、その一つ一つのイミテーションがつなぎ合はされて古い北京はだんだん片隅へ追ひつめられてゆくのである。前門（チエンメン）外の妓院なぞも、もうしづかに歌を聴き胡弓の哀音に耳をすます場所ではなくなつた。内地にゐる頃から私は北京が變つたといふことを聴かされてゐたが、まさかこれほどひどい變りやうをしやうとは思はなかつた。私がはじめてこの古い都をおとづれたのは一昨々年（昭和十二年）の秋で北支の戦線はやうやく八達嶺

を越えて張家口に延びたばかりのときだつた。そのせゐか北京はひつそりとして物さびしく、どこを歩いても街は泣きぬれたやうな表情をしてゐた。日本軍が占領したとはいふものゝまだどうなるかわからないといふかんじが街全體を不安にとぢこめてゐたのである。景山へのぼつても北海公園を歩いても落莫とした印象だけがするどく沁みついて空の色や雲のたたずまゐや山のかたちまでが切ないほどに佗しかつた。その不當にひそやかなかんじだつた北京が今は不當に騒々しく、がさつな街に一變したのである。去年の秋、私が蒙疆の旅を終へてこの思ひ出の多い都へ入つたのは十月の初句であつたが、ある朝、私は北京飯店（そこが北京ぢゆうでの一ばん高いところである）の屋上に立つてうす靄に掩はれた北京全市を見おろしながら夢見るやうな感懐に涵つてゐた。しかし、それもほんの一瞬間にしか過ぎなかつた。陽がゆるゆるとのぼつてくると街の一角から起つた騒音がみるみるうちに右へ左へとひろがつてたちまち埃と砂煙に埋つてしまふ。三十年間北京に住み古したといふある老婦人のはなしを聽くと、日清戰爭のあとの北京は露地の隅々にまで空氣が澄み

切つて大きな咳ばらひにさへも戰くやうな街であつたといふ。「まるで風の音までハッキリ聽きわけられるやうでしたよ」

老婦人は眼にもう一ぱい涙をうかべてゐた。大官の馬車が都大路をすべりだすときには一里ほど先きから馬につけた鈴の音があるかなきかのひびきをつたへて、じつと耳をすましてゐるうちに、鈴の音がだんだん大きくなつてくるといふ。心たのしく爽やかな氣持が思ひやられるやうではないか。そんな靜けさを今日の北京に求めることはできないとしても、この街が傳統の中に保つてきた風格だけは何處かに殘しておきたいと思ふのが、せめてもの旅人の人情でもあらうか。三年前の北京は、このやけくそな騒がしさとくらべると悲嘆の思ひに胸をふさぎ聲もなく泣きぬれてゐるといふかんじだつた。城外一帶に低迷する不穩の空氣は容易に一掃しがたいものがあり、それが絶えず城内に住む民衆の生活をぐらつかせてゐたのである。私たちは何處を歩いても日本人の顔さへ見れば追從笑ひをしてゐる支那人の顔にぶつかつた。しかし笑つてゐるのは彼等の顔面神經だけで眼は一種の名狀することので

きない複雑な敵愾心にみちみちてゐる。復讐と憎惡と輕蔑をこめた眼の輝きにふれるごとに私たちはどきつとして立ちどまつた。街を歩いてゐる日本人の數も非常に尠く、長いあひだそこに定住してゐた人たちもみんな志をすてゝ内地へかへらうとしてゐたのである。停車場は子供や女房づれの人たちでごつたかへしてゐた。その上裕福な支那人はほとんど城外に逃避してゐたので市民の大半は一日一日の露命をつなぐことだけを目的としてゐるやうな窮民であるといつてもよかつた。美人の多いと言はれる北京でわれわれは若い女に會ふことさへも珍らしかつたのである。その頃は内地の新聞社から特派員が續々とつめかけてきてヂャーナリズムの報道陣がやつと整ひかけたばかりのときだつた。私もおくればせに馳せ參じた特派員の一人である。前からゐるY新聞社の伊能が、あたらしく着いた私たちを、その頃たつた一つ店をひらいてゐた白宮といふダンスホールへつれていつてくれた。ダンスのやりたいものはダンスをやり、私たちは酒場でビールを飲んでゐたが、夜が更けて外へ出ると洋車（ヤンチョ）のむれがどつと近づいてきた。伊能が何か話しかけると彼等は夜の街

を風を切つて駈けだしたのである。哈徳門にちかい小路の中はまつ暗（くら）で、その左手に背丈ほどの高さの煉瓦塀にかこまれた門構への家があつた。伊能は前にも來たことがあるらしく門柱のかげになつてゐる小さなベルを立てつづけに鳴らした。蔦の葉が門の上に掩ひかかり、それがために塀も大半かくれてはゐたが、その蔦の葉のあひだからひとすぢの光がさしてきた。塀の上の小さな穴（あるひは郵便ポストであつたのかも知れない）があいて大きな眼が二つ覗いてゐる。伊能が北京語で何かぺちやくちやとやつた。すると急に門の横の潜り戸があいたのである。鍵なりになつた庭の片隅には籐椅子がならんでゐた。潜り戸をあけてくれたのは水色の上衣を着たロシヤの老婦人で、彼女は手眞似と表情ではなす伊能の言葉をすぐに了解したらしい。同じやうな恰好をしたもう一人の女がビールを運んできた。電燈の灯かげが鈍く、塀にそつとならんでゐるアカシヤの葉が風にゆれてゐる。そこへ、バルコンの内側の扉があいて赤いガウンを羽織つた女が出てきた。低い階段をおりながら前かゞみに泳ぐやうな恰好をしたと思ふと彼女はたちまち

になつ

た。——顔だけはうす紅で頬をぼかしてゐるが、胸には肋骨が露はにうかび、手も足も枯木のやうにほそく、肉體といふかんじを伴はぬ骨格の無氣味な印象だけが彼女の動作の中に沁みついてゐる。ワルソーの女で、故郷には子供が四人あり、亭主と死別してから北京まで

來てゐるのだといふ。厭なものを見たといふ氣持が次第に堪へがたいものになつてきた。私はそれとなく席を立つて門の横の潜り戸をあけ逃げるやうに外へ出た。大通りはもう眞つ暗で、人通りはほとんど途絶えてゐるのに露店商人はまだ店をひらいてゐるらしく、カンテラの灯かげが大地の上を低く彷徨ひ、その横の廣場には梶棒をおろした洋車がならんでゐる。俥夫たちはそこで一夜をあかすつもりであらうか、首をたれたまゝじつと俥の下にしやがんでゐるのだ。前へ前へと進んでゆく戰爭のあとにとり殘された北京の町の表情から不穩な影は一掃しつくされてはゐたが、しかし、それだけに底に沈澱してゐる無氣味な不安は一層堪へがたいものになつてゐる。そのとき私の眼に、大きなふくべ（瓢）を大事さうに抱へてしきりに内部を覗きこんでゐる一人の老俥夫の姿が映つた。そ

つと近づいていつたが、しかし私の靴音よりもふくべ（瓢）の内部に氣をとられてゐる彼は顔をあげようともしなかつた。夜が更けてゐたので衰れさがひとしほ深かつたのかも知れぬ。私はたしかに蟋蟀の啼く聲を聞いた。——ふくべの上の方に穴がむり、彼がそこから巧みな手つきで餌を落してやると、蟋蟀は纖ぼそく澄みとほつた聲で啼きだすのである。騒音にうちひしがれた街の中で古い習俗を追ひながら生活に喘いでゐる支那人の姿を私はそこにハッキリ見出したやうな氣がした。

今、北京飯店の前の廣場の片側は洋車の列で埋まつてゐる。ある夜、——私がおそく宿舎へかへつてくると、しづまりかへつてゐた洋車の列の一角がざわざわとくづれ、二三人の俥夫が急に立ちあがつた。片手を高くあげて勇ましく前へ踏みだしてゐる恰好は幾分おどけてゐるが、しかし自然にあふれるうれしさが一種嚴肅なかんじを唆り立てゝゐる。すると、ならんでゐた俥夫たちが一齊に立ちあがつた。彼等は將軍を迎へる軍隊のやうに廣場の兩側に整列したのである。私は飯店の入口の階段に突つ立つたまゝこの異樣な光景

に見とれてゐた。

今まで、一人の客を奪ひあふために互に怒號しながら犇めきあつてゐる俥夫たちを見ることに馴れてゐる私にとつて、彼等がこのやうに一致した動作をしてゐるといふことだけでも意外だつた。しかし、間もなくそこへもう一つ意外なことがあらはれた。といふのは、電車通りを突つ切つてこつちの方へ歩いてくる一人の日本人の姿がだしぬけに街燈の光りの中にうかびあがつたからである。彼は自分がさういふ風にして迎へられてゐることを豫期してゐるらしく、遠くから片手をあげて答へると俥夫たちもまたどつとはぢけるやうな歡聲をあげた。

私の立つてゐるところから見ると、彼もまた自分を迎へる雰圍氣の中へ、恰かも凱旋將軍が乘込んでくるときのやうな悠揚たる落ちつきを示して、威風堂々と表玄關の方へちかづいてきたのである。彼と向ひあつたとき私は思はずどきつとして足を踏みしめた。

「よう、南原君！」

「えつ——？」

といつてから、彼は私の顔を透かすやうにして、「何だい、君か？」とさつきの凱旋將軍の姿勢のまゝで答へた。私がはじめて南原君に會つたのは今から二十餘年前で、その頃私はたしか十九か二十で、彼は三十を少し越してゐたやうに思ふから今はもう五十をすぎてゐるであらう。彼は才氣と謀略と情熱とを兼ね備へた男で、もし順當な運命に導かれてゐたら世間的には大したことはなくとも現在の日本に重要な人間の一人にはなつてゐたであらう。しかし、彼はあらゆることに蹉跌して、何をやつてもうまくゆかず、天稟の才能を空費しつくしてどうにもあがきのとれないやうなねぢ曲つた男になつてしまつたらしい。さういふ噂を聞いてから十年あまりになる。その南原にこんなところで會はうとは思はなかつた。

彼の泊つてゐるのは同じ飯店の三階で、日夜欝血する氣持を持扱ひかねてくらしてゐるといふことを私はずつと後になつて理解したが、しかしその晩、私の部屋へ入つてきた彼はすぐポケットの中から小さい手帖をとりだし、自作の歌を朗詠して

聞かしてくれた。

らふそくの灯かげはゆれて澁き茶にあじあのあすを說ける人かも——

「あゝ、さつき君は、ホテルの前の廣場で洋車の俥夫たちが僕を迎へてくれたのを見てゐたらう、——彼等にあんなユーモアがあるといふことを知つてゐる日本人はことによると北京ぢゆうで僕ひとりかも知れないよ、人間同志が心から觸れ合ふキッカケといふものは結局あんなところにしかないらしい、こいつは理窟や工作ぢやないからね」

「だけど、どうしてあんな風にゆくもんだらうか？」

「そいつは君、ある晩、僕が醉つばらつてかへつてきたときに懐中に殘つてゐた全財産をあいつたちに分けてやつただけのことさ、それもあんな結果を豫想したからぢやない、唯、ふらふらとそんな氣持になつたんだよ、つまりそのときの僕の姿がユーモラスなかんじをあたへたんだな、——北京でもつとも質のいいのは洋車の俥夫だよ、あいつたちは町を愛するために生れてきたやうなものさ、あの中には貴族

の成れの果てもゐるし、零落した資産家もゐるよ」

その次の日であつたが私は「洋車の大將」である彼につれられて、その晩店をひらいたばかりの成吉思汗鍋をつつくために前門外にある古色蒼然たる店へ入つていつた。絶え間なしに出たり入つたりする客の影が壁に映つてゐる。鐵格子の鍋には羊のあぶらが焦げついてつよく鼻をうつにほひが食慾をむかつかせる。どのテーブルも客で一ぱいなので私たちは入口の通路からすぐ右にそれたうす暗い部屋でお茶を飲みながら待つてゐた。南原はそのとき彼と向ひあつてゐる私のうしろのテーブルを瞬きもせずに見詰めてゐたが、

「いいなア」

と、だしぬけに感嘆したやうな聲で呟いた。そのテーブルを占めてゐるのは若くとも七十か八十くらゐの老人と、たぶんそのどつちかの娘にちがひないと思はれる十八九の娘である。老人のうちの一人は頭がつるつるに禿げ、もう一人は腰が曲つてゐた。ほそ長いテーブルのはしには大きな風呂敷包のおいてあるのが見えた。ゆつ

くりゆつくりと献酬をかさねては何かたのしさうに話しあつてゐる。彼等は成吉思汗鍋の客ではなく小皿に盛つた正體のわからない料理をつついてゐるのであつた。

「城外から娘を賣りにやつてきたんだよ、そいつが昔の友だちと會つて一杯やつてゐるところかな？」

少しうがちすぎてはゐるが先づさう解釋するよりほかに仕方がないやうな光景であつた。老人たちは遠慮してゐる娘に、これを喰べろあれはどうだ、としきりに訊きかへしてゐるやうであつた。私は今まで北京で親子やその友人たちがこんなに安らかにたのしくテーブルをかこんでゐる光景にふれたことがない。一昨々年從軍してきたときは悲慘なものばかりを見つづけてきた。南原がこの老人たちに心をひかれたのも、彼の胸の底に鬱血してゐる感情が佗しい幻想を唆りたてるがためであらう。席が出來たといふボーイの知らせで私達はすぐ立つていつたが、高粱酒を呷りながら喰ふ羊の肉は私の食慾にこころよい調和を與へた。五皿を代へ、汗びつしよりになつて元の部屋へもどつてくると、さつきの老人たちはまだ同じ席にゐて前と同じ

速度で酒を飲み、しきりに箸をうごかしてゐる。

「いいなア」

と、私がこんどは感嘆した。娘の顔にかすかな憂色もうかんでゐないことが私の心をほつとさせたのである。彼女の賣られてゆく妓院と娼樓はその露地からあまり遠くないところに軒をならべてゐるのである。

客

——新浪人風俗——

愁

障子をあけてみると途方もなくいい月夜なんですよ。今だぞ、と思ひながらも、氣もちがいやにゆつたりしてしまつてどうにもやりにくい。——醉ひすごしたせゐもあるんですが、それよりも相手がぐいぐいと調子よくこつちの話に乘つてくるんで、ますます手が出なくなつてしまふんです。實はいいかげんな潮どきを見はからつて、白河の堤防のあたりまでドライヴにつれだし、機を見てひと思ひにやつてしまふつもりでゐたんですが、話がうちとけてくるにつれて、かうやつて樂しく時間を過してゐることの方がほんたうのやうな氣もちになつてしまふんです。やりにくいからやめようといふやうな道理のわかつた話ぢやない。決心が鈍るといふのか、それとも覺悟が衰へたといふのか、ときどきかうしちやあゐられないぞと思ひながら、結局どつちでもいいやうな氣もちになつてしまふから妙ですね。これで斷念し

ちまへばそれきりでまつたくバカみたいなことになるんだが、しかし何とか恰好をつけなくつちや何のためにすき燒を喰つたり酒を飲んだりしてゐるのかわけがわからなくなつてしまふ。——いつそのこと腹の底を洗ひざらひぶちまけた上で生かしてやらうといふ氣もちになつたんです。あゝいい月夜だ、と白ばつくれた聲で言ひながら私は庭下駄を突つかけました。芝生の向ふまで歩いてみませんか、どうです、劉さん、と誘ひかけると、劉はにやにやと笑ひながら上着を座敷に脫ぎすてたまゝでおりてきました。考へてみりや向ふだつて萬更何の豫感もなかつたわけぢやないでせう。何時ピストルをつきつけられるかといふくらゐの心構へはあつたらしい。——醉つたやうに見せかけながら、神經だけはぢつとこつちをおさへてゐる。さすがに大きな陰謀をたくらんでゐるやつだけに度胸だけは見あげたものですよ。こつちが話を横へ横へと外らしてゆくにつれて、向ふもこつちの方へ平氣でもたれかゝつてくる。芝生を横切つて築山の裏へ出たとき、私はいきなり立ちどまつて、

「おい！」

と急に言葉を改めました。發作と言へば發作ですが、長いあひだの經驗で、今だな、といふ氣もちがぐつとこみあげてきたのです。劉は二三歩あとへしりぞいて、

「えつ？」と言ひながら肩をすくめました。咄嗟のあひだでどんな風に動いたか自分でもよく覺えてゐませんが、私は劉の前に立ちはだかつて、「わかつてゐるだらう？」——と言ひながら左手で彼の手首をおさへ、ぐつと前へひきよせるやうにして、ズボンの上から內ポケットに忍ばせたピストルにそつとさわらせたのです。

「何もいふ必要はない。——今夜かぎり姿を晦ましてしまへ、男同志の約束をしよう」

「必ず」

と、劉が顏へ聲で言ひました。「實行します」

その聲を聞き流すやうにして私は大聲で笑ひだしたのです。

「まつたくいい月夜ぢやないか。——劉さん、今夜はひとつ私の唄を聞かせよう、さア」

と、汗ばんでゐる右手を腰の上でこすつてからしつかりと劉の手を握りしめました。それから座敷へかへると、何かしきりに笑ひさざめいてゐる藝妓たちの前へぐつたりと胡坐をかき、まるで何事もなかつたやうな氣もちで、得意のよさこい節を唄ひだしたのです。劉の顔には深い落ちつきがあらはれ、私が唄ひ終るとこんどは劉が、「やりますかね」と言ひながら屈托のない微笑をうかべました。今になつて考へるとやつぱりこれでよかつたと思ひますね。——綠林から出たやつには理窟よりも人情の方が先きに來る。あいつがまゐつたのはポケットに忍ばせたピストルぢやなくて、しづかな言葉で風の通りすぎるやうに事件を吹き流してしまつた、あの瞬間の心のゆとりですね。さうかといつてあんなことがどんなときにだつて出來るといふわけのものぢやない。月夜のせゐもあるが、あのふわりと來る醉心地、——つまり自然の安らかさといふか、調和の妙といふか、それも對手が劉だつたからぴつたり來たんでせう。いや、私がえらいんぢやなくて劉がえらいんですよ。まつたく機みを失つてゐたらどんなことになつてゐたかわかつたもんぢやない。ピストルを胸

先へつきつけたら、あいつだつて體面がありますからね、さうやすやすとこつちの思ふとほりにはなりますまい。——

そこは松島街の角にある『ヤマトホテル』の三階にある私（筆者）の部屋で、もう夜は更けてゐたが、しかし窓から見下す街の辻々には武裝した歩哨がたち、夜目にも銃劍が白く光つて見えた。醉客のみだれた靴音が、チョッピイ（俥夫）のさわぐ聲にもつれて聞えてくるのである。テーブルの上のジョニウオーカアは底の方にかすかな量を殘してゐるだけで、波田の聲には次第に凄味が加はつてきた。彼は人を殺すことを商賣にしてゐる。——商賣といふとおかしいが、直接飯を喰ふ道ではなくて自分を生かす方法なのだ。殺す名分の立つてゐるやつを殺すためなら大つびらな手段がいくらでもある。しかし、いかに戰時狀態であるとは言へ、筋みちの通らないやつをバサリ、バサリとやつつけるわけにはゆかぬ。かくれた民間の志士に殘された仕事がそこにあるのだ。波田は表面、『日華肥料公司』の社長であるが、彼の生活を底へ底へと追ひつめていつてみると、まるで思ひがけないやうな別の一つ

の顔がうかびあがつてくる。おそらく自然の運命がさうさせたのであらう。私はスパイです、と、——彼はしづかな聲でいふのである。「スパイの役割は未然に事を防ぐところにあるんです、醫者が病氣を診察するのと同じ抱負があつてこそスパイの仕事に意義を生じてくるとも言へませう。いよいよ癌だとわかつたら、こいつは外科手術をするよりほかに仕方がないし、——しかし、此處にふくれあがつてきたへんてこなぐりぐりをほつたらかしておくと今に大へんなことになるぞ、といふくらゐのことはちよつと手をふれただけの勘でわかる、大きくなる前に適當な處置をすれば大抵のことは未然に防ぐことができるものです。だから私は自分の仕事に絶對の信頼をもつてやつてゐるんです」

つまり、劉月旦は彼にとつてはどうしても生かしておくことのできない腫物のやうな男であつた。劉は佛租界に住む支那の富豪であるが、表面は親日を裝ひながら、その頃天津の工場街に潜入してきた共産黨の元締をやつてゐる。——何もさういふ證據があるわけぢやないし、彼は親日派の支那人としても立派な位置を保つてゐるのだから、こいつを正面から殺すなぞといふことは到底考へ得られることではない。しかし、スパイの感觸には影のやうに響のやうにぢりぢりと迫つてくるものがある。もちろん波田は誰の命令を受けてゐるわけでもないのだ。唯、さうしないではゐられない情熱が彼を唆しかける。——もしまちがつたらこつちが死ぬだけのことだ。かういふ人間同志の關係では殺した方は殺し得だし、殺された方はむろん殺され損だといふことになる。だから何も、——と波田はいふのである。「われわれに褒美をくれとか、勳章をくれとかいふわけぢやない。唯、この隱れた仕事の中で何かの役目を果してゐることだけを認めてもらひたいんです、私たちの仲間は誰ひとりとして金錢づくで動いちやゐませんよ、もしそんなものが目當だつたら、さう氣輕に命を投げだすなんてことが出來るもんですか」

波田は明日の朝北京へ立たうとしてゐる。都合によつては張家口まで行くことになるかも知れぬ。彼はさういふ使命を帶びてゐるのだ。それ故、何時死ぬかもわからぬといふ氣もちが彼の心に多少の變化をあたへたものらしい。會つてまだ一週間

ほどにしかならぬ間柄であるのに、彼の方から進んでそんな話を切りだしたのも、彼が私（筆者）と意氣相投じたといふだけではなく、何か自分の影のやうなものを私の心に殘しておきたかつたからであらう。

「それで」

と、私がはじめて口を挟んだ。「それきり、その男には會はなかつたんですか？」

「その男？」

波田は輕くうけ流してから、

「――劉月旦ですか、いや、話はそれからですよ。一體何處からはじめたらいゝかな、人間の運命にはたしかに見えない軌道がありますね、實はそのことで自分ながらおどろいてゐるくらゐです」

若い『肥料公司』の社長、波田茂はグラスに殘つたウヰスキーをすゝりあげるやうに飲みほした。醉ひのためか、彼の顏が急に若々しく輝きだしたのである。それから彼は立ちあがつてあけ放した窓にもたれ、あふれるやうな調子でしやべりだし

た。

――話は、それから一と月ほど經つてからである。

八月も終りにちかづいて、北支の戰局もやうやく日本軍にとつて決定的に有利な狀態に入つてきた。內地から來た軍隊はひと先づ天津に集結してから前線に送り出される。ことによつたら通州の二の舞を演ずるかも知れなかつたといふ恐怖の記憶はまだ居留民の胸の奧にくすぶつてゐた。――それ故、內地からやつてきた軍隊を迎へる彼等の眼が異常な感激に顫へてゐたことは當然であらう。萬國橋を渡つて租界地へ入つてくる軍隊の數は一日ごとに數が增してくる。

そのある日の午後、萬國橋の畔に一臺の自動車がとまつたと思ふと、一人の女が扉から半身を乘りだすやうにして立ちあがつた。萬國橋を租界地の方へ右に折れた川ぞひの道には手に手に紙の旗をふりかざした居留民が列をつくつてならんでゐる。炎天の下を行進してきた部隊の兵士たちの汗と埃にまみれた顏に向つて彼等はどつと湧きかへるやうな歡聲をあげた。八月の陽ざかりで、――兵隊のドタ靴が乾

きつた大地を踏みつけると黄色い砂埃がぼうつと舞ひあがる。そのとき、少し傾斜になつた川べりの鐵柵にもたれて群衆の肩越しにぼんやり橋の上を眺めてゐた波田の眼に、全身をゆすぶりながら叫んでゐる女の姿が映つたのである。

彼女は大きな花束を抱へるやうにして持ち、片手で花をむしりとつては行進する兵士の頭の上へ撒きちらしてゐるのだ。

時が時だけにこんな狂氣じみた女のとびだすことにも格別不思議はなかつたが、しかし、波田は妙な好奇心に襲はれて、群衆の波を押しわけるやうにしながら近づいていつた。部隊の行進が途切れるごとに女の姿が群衆の視野の中にくつきりとうかびあがる。自動車の中は花束で埋つてゐるらしい。彼女の手は窓と虚空とのあひだを絶えず動いてゐる。もぎとられた花びらの色がつよい陽ざしをうけてキラ〳〵と輝くのである。ときゞ〳〵川風が濃緑色のスカートを煽つてはそいすんなりとした足が消えるやうに視野をかすめる。

群衆はもうあつけにとられて、橋を渡つてくる部隊の兵士よりもむしろ彼女の方に氣をとられてゐるといふかんじなのだ。波田のゐるところから一町足らずの距離であつたが、身體つきや、顔のかたちで日本人だといふことはすぐにわかる。

「まつたく眼がさめるやうでしたよ、私もつひひきよせられるやうに女の方へちかづいていつたんですが、——顔を見合せたとたんに」

言ひかけて波田は苦しさうに眼ばたきをしてから窓のそとにひろがつてゐる空を見あげた。「ところが、女の方も私の顔を見て何かかんじたらしい、ぢつとこつちの方を向いて、びくつと肩をすくめたんです、——あ、波田さんぢやありませんか、と呼びかけられたときにはさすがの私もどきつとしましたね」

「ハア——？」

勢ひこんだ波田の聲に聽き手である私の方がどぎまぎしてしまつた。そのかんじが彼にも通じたらしく、

「なるほど」

と、波田は頭をかきながら、「ハ、ハ、ハ」と高い聲で笑ひだした。「その

女がまた私と不思議な懸り合ひを持つてゐるんですよ、どうも話がやゝこしくなるが、二十年前、私がまだ東京の××大學に籍を置いてゐた頃です」

波田は椅子の上へふか〳〵と腰をおろした。彼の話すところによると、その女、——大浦伊代子は××女學校の卒業期を前に控へてゐたが、波田の家は彼女の家と遠い親戚にあたつてゐるので、波田は、その頃、滿鐵の社員で大連に暮してゐた伊代子の父親から彼女の監督を一任されてゐたのである。ところが伊代子は何時の間にか波田の級友である玉村と深い戀愛關係に落ちてしまつた。もちろん二人がはじめて會つたのも波田の下宿であるし、二人を紹介したのも波田であつた。「ほんのちよつとした機(はず)みが何時の間にか人間の運命の上にこんな大きな開きをつくつてしまふもんですからね、まつたく男女の關係くらゐ厄介なものはありませんよ」

波田はラグビーの選手である玉村を信じ切つてゐた。——それが、裏切られたとわかつたのは直接玉村の口からはじめて二人の關係をうちあけられたときである。しかし、波田をおどろかしたのは、彼等がこんなにも急速に結びついたといふことで

はなく、一年ちかく彼の眼をぬすんで一歩々々と深みへ入つていつた彼等のことを少しも知らないで過してきた自分の迂闊さであつた。その迂闊さに腹が立つてきたのである。玉村も伊代子も波田が何故これほど怒らねばならないかといふことがわからなかつたらしい。波田はそれほど怒つたのだ。

それも二人がもし戀愛の開始されたときから彼にうちあけてゐたらまだしもそれほどではなかつたかも知れぬ。そのとき伊代子はもう姙娠してゐたし、それ故今となつては厭でも應でも波田に縋つて二人の結婚について助力を仰がねばならぬのだ。さういふ土壇場へ來てからうちあけられたといふことが彼を一層いきり立たせたのであらう。むろん彼は二人を面罵した上でその懇願をはねつけた。

「こいつはどうにも仕方がありませんね、今になつて考へると、あのとき私が萬事呑み込んでゐたらこんなことにはならなかつたかも知れません、しかし、あのときはあゝするよりほかに仕方がなかつたんです、その頃の伊代子は純情な初々しい少女で、だからもうどうしていゝかわからなくなつてしまつたんでせう、そこへもつ

てきて玉村といふ男が體力だけは人の二倍くらゐもあるくせに、これはまた氣のいお坊つちやんで、いよ〳〵女が姙娠したとなると立ちすくんだまゝ手も足も出なくなつてしまふんです。到頭伊代子の方が決心をして父親に長い手紙を送つたらしい、——何しろ母親のゐない家庭ですから父親もびつくりしたにちがひありませんよ、慌てて東京へやつてくるとすぐに私をたづねて、この結婚を許したものだらうかどうだらうかと相談を持ちかけてきました。私はもちろん、二人を速刻別れさせなけりやならん、結婚なんか以てのほかだと極めつけてやりました。玉村がもう少ししつかりした男だつたら、女をさらつてゆくこともできるし、親父と直接談判することだつて出來ないことはありませんよ、それが出來なかつたんです、——女の方は父親がつれて大連へかへつてしまふ、玉村は玉村で、萬事終つたといふ氣もちですつかりあきらめてしまつたらしい。たよりにならないと言へばたよりにならないが、このあきらめの早いところがまたあいつの魅力なのかも知れません」

話の樣子から察すると玉村といふ男は一切合切波田に一目置いてゐたらしい。

「ところが伊代子は父親につれられて大連へかへると間もなく何處かへ姿を晦ましてしまつたんです。ちやうどその頃、私の方にも生活を根こそぎぶつ壞さなければならぬやうな事件が起り、何時の間にか二十年ちかく經つてしまつたんです。その頃十八でしたから伊代子はもう四十ちかくにはなつてゐるでせう。——萬國橋の袂で顏を見合せたとき、私はもう茫然としてしまひました。それが、まるで昔とそつくりなんですよ、私も比較的年齡をとらない方ですが伊代子の若いのにはおどろきましたね。しかし、そんなところで立ちばなしをするわけにもゆかないので、私は佛租界にある私の事務所を教へてやり、——氣が向いたら今夜でも來ないか、といふと、えゝ行きませう、といふのです。私は事務所の二階を自分の居間として支那人のボーイと二人で暮してゐたんですが、その日は夕方から雨になつたんで、幾分心待ちにはしながらも、まさかと思つてゐると、ボーイが扉をあけ、かういふ方がいらつしやいましたといつて名刺を持つて入つてきたのです。——名刺には花寶玉と書いてあるんですよ。へんだなと思ひながら、通せといふと、ボーイと入れちが

ひに空色のガウンを羽織つた女がすうつと入つてきました。それが伊代子なんですよ。指には大きいダイヤを二つもはめてゐるし、首には眞珠が眩しいばかりに輝いてゐる、――一見して彼女が途方もない豪勢な生活をしてゐることだけはわかるんです。氣を呑まれたかたちで私が呆然としてゐると彼女は私の前の安樂椅子に腰をおろし、ねえ、わたしが何をしてゐるかわかる、――といふんです。さア、といつて眼をパチパチやつてゐると、びつくりなすつちやいけませんよ、あなたは親日系の支那人の中に劉月旦といふ男のゐることを御存じでせう、といふぢやありませんか。びくつとしましたね。うん知つてゐるが、といつて膝を乘りだすと、伊代子は蔑むやうな微笑をうかべ、その劉が實はわたしの亭主なんですよ、――とハキハキした聲で言つたのです」

波田はどよめきかへしてくる感情をどう整理してよいかわからなかつた。

萬國橋で伊代子に會つたことも意外であつたが、しかし、その伊代子が劉月旦の女房になつてゐるにいたつてはいよいよもつて意外である。彼女が劉といつしよになるまでには相當に長い曲折があつたが、結局さうならざるを得なくなつた原因は玉村との結婚問題が破れてからであらう。それにしても現在の彼女がどんな生活をしてゐるかといふことはもう大抵察しがつく。――波田はこのときほど自責の感情に鞭うたれたことはなかつた。

「劉月旦なら」

と波田が苦しさうな聲で言つた。「立派な男だ、――むろん君を心から愛してくれるだらう？」

「そりやあね」

伊代子は空とぼけた調子で笑ひながら、

「――愛してゐるにきまつてるわ、たゞわたしがあのひとを愛することができないだけよ」

「ちやあ、君はまだ玉村のことを思つてゐるのかい？」

「それも今までは忘れてゐたんだけれど、あなたの顏を見たら急に思ひだしちやつ

たのよ、——わたし、何だかあのひとにひよつこり會へさうな氣がしてゐるの」

「もう、止さう、そんな話は。——それよりも君は今日、何故あんなところに立つてゐたんだい？」

「何故つて、——日本人ぢやないの、せめてあんなことでもしなければ氣持の遣り場がなかつたのよ」

言葉にあらはしきれないものを、ひたかくしにかくさうとする苦しさを伊代子の表情の中にかんずると、波田は思はず視線を横へ外らしてしまつた。

その晩は大した話もせず伊代子は門の前に待たせておいた自家用の自動車でかへつていつたが、それからは思ひだしたやうに訪問してきたり電話をかけてきたりする。半ばの好奇心からそつと配下の者に命じて彼女の行狀を調べさせてみると、彼女の存在が知られてゐないのは日本の居留民の間だけで、外人關係の中にあつては花寶玉夫人の名前は社交界の女王として持て囃されてゐることがわかつた。——その生活振りの大膽で亂倫なことには調べた男たちも舌を捲いてゐたさうである。

そのことがわかると波田の頭には何かぴりぴりとするどく閃くものがあつた。時が時でなかつたらそんなことは夢にも考へなかつたであらう。彼は伊代子を自分たちの一味として彼女にスパイの役割を振りあてゝやらうと思つたのである。彼女を小さい個人的苦悶の中から救ひあげてやらうなぞといふ了簡ではない。もつとはるかな大きな目的のために彼女の立場と才能と容色と、——場合によつてはその亂倫荒蕩を極めた生活態度までも利用してやらうと考へたのである。

それを彼女に打ちあけようかどうしようかとまだ決しかねてゐるときに、偶然にも久しく會はない玉村が彼を訪ねてやつてきたのだ。何時天津に來たのかといふとたつた今着いたばかりだといふ。性來の放蕩兒である玉村はインチキ事業家にひつかかつて家產を費ひはたし、大連へ來てしばらくぶらぶらしてゐるうちに、そこで知合つた仲間といつしよになつて、天津へ砂糖を運んでひと儲けしようといふ計畫を思ひついた。天津には波田がゐる。——波田の仕事をうすうす知つてゐる彼はいざといふときには波田がどうにかしてくれるだらうといふ胸算用をしてゐたらし

い。無鐵砲と云へば無鐵砲であるが、しかし、さういふところにも玉村の性格がうきだしてゐる。

ところが案の定、玉村の運んできた砂糖は稅關でおさへられた。唯おさへられただけではない、場合によつては處罰を受けなければならないやうな破目に陷りかけてゐるのである。玉村が××と關聯のある波田をたよつてひと肌脫いで貰はうと思つたのもそれがためであらう。聽いてみるとそんな話は波田の口のきき方一つでどうにでもなることだ。しかし、彼の心は今そんなことよりも、もつと大きな問題に當面してゐる。伊代子を自分の仕事にひき入れようとするときに、玉村が出てきたのでは、事が根こそぎにぶち壞れてしまふ。スパイの仕事にとつて戀愛は絶對の法度である。——彼はしばらく考へこんだあとで、

「どうだい、——その後伊代子に會つたかい？」

と、空とぼけた調子で話を外らした。

「いや、あれきりで一ぺんも會はないよ、どうしてゐるかな、この頃になつて妙に

あいつのことばかり考へるんだが」

波田は困つたと思つたが、さり氣ない風を裝つて、

「ぢやあ、もし此處に伊代子があらはれたとするね、——向ふの方ぢや君のことなんかケロリと忘れてゐるといふ場合だよ、さういふときにどうするかい？」

「どうするかいつて、そいつは君、その場合にならなくつちやわからんな」

なるほどそのとほりだ。そのとき波田は何時であつたか伊代子が、この頃になつて玉村に會へさうな氣がするといつた言葉をおもひだしたのである。考へてみればその豫感が實現したやうなものではないか。運命といふものは人間の力でさうやすやすと動かすことのできるものではない。いくら自分だけがあくせくしたところで、二人が何處かでバッタリ會つてしまつたらもうそれきりぢやないか、いつそのこと正面から事をぶちまけてしまつた方が早い、——と、波田は急にさう考へ直した。そこで、實はおれがこんなことを言ひだすにはわけがあるんだと、彼は俄かに語調を改めた。伊代子は今天津にゐるんだよ、——それも立派に結婚して、他人の

奥さんになつてゐるんだ。そこへ君が現はれたら彼女だつて多少心が動揺しないわけにはゆくまい。ところが、對手の男といふのはおれの親しくしてゐる支那人で、そいつは伊代子に惚れぬいてゐる。男には男同志の義理といふものがあるからな、そこで君に頼むことは、伊代子に會つても知らん顔をしてゐてもらひたいといふことだ。こんどこそ君がつまらんキツカケをつくつたりするとおれはほんたうに怒るぞ！

そのことなら大丈夫だ、——と、玉村が答へた。今のおれには女房もあるし子供が二人もある。格別惚れて出來たといふ女房でもないから、女房だけならあるひは伊代子の方へひきつけられるかも知れないが、おれの頭は今子供たちのことで一ぱいになつてゐる。だから、それだけは絶對におれを信じてくれ、と玉村は屈托のない聲で答へた。そのことを條件にして波田は稅關の方へ口をきいてやることになつたのである。玉村は十日ほどして歸るといふので、彼はその晩伊代子を呼んで、彼の仕事に助力してくれぬかと切りだしてみると、彼女はひそかにさういふ機會の來

るのを待つてゐたらしく、必ず命にかけてもと深い決意を見せて誓つたのである。

「ところで、——」と、波田は眞劍な表情を示しながら言つた。「實はもう一つ誓つてもらひたいことがあるんだ。——玉村ね、あの玉村さ、あいつが今天津に來てゐるんだよ、ひよつと會ふかも知れないが絶對に口をきいてもらひたくないんだ」

「今のわたしには、もうそんなことを考へてゐる餘裕はないの、——もつとわたしを信じて下さい。必ず誓つてみせるわ、あなたのいゝ部下となることを」

——ところが、不思議なことに、その次の日から伊代子はパッタリ姿を見せなくなつてしまつたのである。伊代子だけではない、玉村もそれきりで何處へ行つたかわからなくなつてしまつた。彼の泊つてゐるホテルへ行つて聞いてみると、もう四五日前に出たきり歸つて來ないといふ。こいつは面倒なことになつたと思ふと、波田はもう居ても立つてもゐられなくなつてきた。

配下の男に命じてアパートといふアパートを探してみたがまるで目當がつかないのである。波田はこのとき、ひよつこり劉のことを思ひだしたのである。自分の好

意を裏切つた伊代子と玉村を憎む氣もちも強かつたが、しかし誰よりも苦しい立場に置かれてゐるのが劉であることが犇々と彼の胸に來た。もし彼が劉のことを考へなかつたらおそらく二人を生かしてはおかなかつたであらう。——本氣で探す氣になつたらどんな方法だつてあるのだ。波田は劉が自分との約束を守つて、邦人經營の會社を內部的に攪亂しようとする計畫を放棄したことを知つてゐる。つまり劉は男の約束を守つたのだ。さう考へてくると劉のためにひと肌脫いでやらうといふ氣もちが不意に彼を唆しかけたのである。波田はその足ですぐ劉を佛租界の隱れ家に訪問した。夕方であつたが波田を見ると劉もさすがにびつくりしたらしい。波田は先づ然諾をまもつてくれた劉に感謝の意を傳へ、それから伊代子と自分との關係を洗ひざらひ話してきかせた。

「劉さん、——あなたの言葉一つで二人に對する態度を決めようと思つてゐるんだが、その前に私の聞きたいのは、あなたが心から伊代子を愛してゐるかどうかといふことなんです」

劉はやつと納得がいつたらしく寂しさうな微笑をうかべた。

「私はあの女を何度殺さうと思つたか知れません、——だけど、今はもうあきらめてゐます、もうあの女なしには生きてゐられないことがわかつたからです、それぢやあ、どうして私が伊代子を愛さずにゐられないか、といふことになると、こいつは理窟や言葉では說明が出來ませんね」

「いや、それだけ聽けば充分です、伊代子だつて馬鹿ぢやない、——日本の女性としてとるべき道は知つてゐるでせう、どうか當分私にまかせておいて下さい」

波田はそのときになつてはじめて、自分の仕事のために伊代子の境遇を利用するよりも以上に大きな問題の殘つてゐることを知つたのである。「劉さん、——改めて私と握手しませう、日本と支那が今交戰狀態にあるときに、あなたと僕とが一對一の人間としてしつかり結びつくことの重要なことを信じてくれるでせう」

「信じます、——命にかけても」

その晚、事務所へかへつてくると、波田はすぐ配下に命じて手がかりのありさう

な場所を殘らず調べさせた。

二三日經つうちに街で伊代子の姿を見かけたものがあり、すぐあとをつけると支那街の中にある大民玄洞といふアパートに潜伏してゐることがわかつた。波田はその報告を受けると自分でアパートへ出かけてゆき、彼獨特の腹藝で、

「これでもう古い思ひ出の精算はついたらう、——玉村！　貴樣も日本の男の誇を全うするために今夜の船で女房のところへかへれ」と、有無を言はさず極つけた。それから彼は、伊代子のために外人相手のダンスホールを經營して、とにかくまともな生活の道を立てる方法を講ずるやうに劉月旦に話をしてやつた。理窟なしに伊代子は波田の眞實に動かされたのである——。

話し終つた後で波田は疲れたやうにぐつたりと頬杖をついた。

「うつかり長ばなしをしてしまひましたね、今は劉も伊代子も私の仕事に協力してゐますよ、——まつたく人生といふものはとりとめがないやうでゐながら結末だけはちやんとついてゐるものですね。あんなときに玉村のやうなやつがだしぬけにとびだしてきたのも妙な話ですが、しかし、もしあいつが出て來なかつたら伊代子は永久に救はれなかつたかも知れませんね」

「それで、——」

と、私（筆者）が言つた。「その伊代子さんはまだ天津にゐるんですか？」

「ゐますとも。劉は今、北京に行つてゐますが伊代子は英租界でヴァンダといふ舞踏場を經營してゐます。そこが今、われ〳〵の足場になつてゐるんです、あなたも、もう一度こつちへいらつしやい、——こんどおいでになつたら是非二人に紹介しますよ」

私も一月の豫定であつた北支の從軍を終へて明日早朝、塘沽から日本へ出發する事になつてゐる。窓の下の街はもう人通りが絶えて、とき〳〵醉漢を訊問してゐる歩哨の聲が一入凄烈さを加へてきた。そのせゐか、夜風が急にひやりとしてきたやうである。

生理

月明の春の一夜に熱情的な詩人、池田秋月が内海がよひの船の上から投身自殺をやつてからもう何年になるであらうか。私は池田秋月には彼の生前一ぺんも會ふ機會はなかつたのであるが、しかし彼の死後になつて彼のことをいろいろに考へねばならぬやうな妙な偶然にめぐりあふことになつた。一口に言へば彼の死がもたらした一つの人生的事件に關りあふといふことになつたわけである。それは私が、死の直前までこの詩人の心にふかい翳を投じてゐた、——といふよりも、その女の存在が間接には彼の自殺の動機になつたと思はれる一人の若い女を知つてゐるからであつた。秋月の自殺を報じた新聞記事をよんだひとたちは秋月の決心がその女と最後の一夜をともにすることによつていよいよぬきさしならぬものになつたといふことを容易に理解したであらう。さて、その女、川瀬クミ子であるが、彼女のすがたは

秋月の絶筆だと言はれてゐる遺書のやうな詩の中にも熱情的でセンチメンタルなこの詩人にとつて彼の愛慾の最後をかざるうつくしい偶像として描きあげられてゐるのである。

山の宿の緑にむかひ
若楓の波を見おろし
顔合せて微笑めば
君がこゝろのまことをば
神はいのちにつなぎけん
細い若枝の直ぐなれば
落ちる涙もはらひけん

三年の後に思ひかなうた
かぼそい若木をうちまけば

乙女の蕾にも似た花が
風にふるへわななないた
魂消る消耗のあとに
さむることなく眠らんと
君を得たと君は知らぬ——

これは當時の新聞に發表された詩の一節であるが、いふまでもなく彼女との抱和のたのしさをこころゆくまでうたつたものにちがひないのである。川瀬クミ子はその日、養父の墓參にかへるといふ名目で外出し、それから三日目の朝ぐつたり疲れて歸つてきたのだ。彼女は秋月とわかれてからこんどはほんたうに墓參をすまして歸つてきたのであるから。彼女はN市に住んでゐる私の中學時代の友人狹間丈太の愛妾なのであつた。狹間丈太はN市の富豪で、道樂半分に小さい新聞社を經營してゐたことがあるが、彼と彼女との交渉はそのとき新聞社長と婦人記者といふ關係においてはじ

まつたのである。彼はある機會から彼女とのあひだに肉體的な交渉が生ずると、そのまゝ川瀨クミ子を自邸にひきとつて彼の妻と彼女とを同じ棟の下に住まはせてゐた。これは彼が妾宅を構へる費用を節約したためではなく、一つの理想を實現するためであつた。狹間丈太は絶えず大がかりなことをたくらんでゐるだけに、どんな些細なことでも自分の判斷に確信をもち、その確信だけは是が非でも押しとほすといふ面魂をもつてゐた。川瀨クミ子との關係においても彼は結婚と戀愛とを自分の都合のいいやうに區別して、結婚は心理的調和であり戀愛は生理的調和であるといふ妙な說をつくりあげてゐた。川瀨クミ子との關係においてもこの二つの肉體の調和は避くべからざるものであつた。だから彼と彼女とが××××××××××××××××ことであつたのである。彼は私に向つて、自分は川瀨クミ子を知るまでは戀愛といふものがこんなに底の知れぬほど深いものだといふことを考へなかつた、としみじみ述懷したことがあるが、しかし彼の說にも一理はあるであらう。つまり狹間丈太のいふところによると、戀愛といふものは精神的な愛情の入つ

てくる餘地のないほどの肉體的調和の上に成立つべき筈のものである。そこで、彼の妻によつて精神的な愛情をみたし、川瀨クミ子に××××これこそ理想的な家庭ではあるまいか、といふことになるわけであらう。つまり『兩手に花』といふかういふ考へ方は多くの事業家に共通するもので一人狹間丈太だけのものでない事はわかりきつてゐるが、彼と彼の仲間たちとちがふところは、唯、彼がその考へを實行にうつすことにおいて、ほかの誰よりも大膽であり勇敢であつたといふだけのことである。かくのごとき大抱負の下に川瀨クミ子と同居することを昔N市の名妓で(あつたといふ)さういふ世界の屈從的道德に馴れしたしんでゐた彼の妻になつとくさせることには大した骨の折れる筈もなかつたのであるが、しかし、當の本人である川瀨クミ子をなつとくさせるまでには相當に時間がかかつたらしい。しかし戀愛が進行するにつれて、(つまり彼の言葉によれば肉體の調和がふかまるにつれて)彼は到頭、このN市隨一のインテリ女性と言はれた川瀨クミ子を彼の「愛人」といふ堂々たる名目によつて彼の妻と同居させることに成功し

たのであつた。私が彼女とはじめて會つたのは數年前、N市の街はづれに狹間丈太の新邸が落成したときのことだつた。彼が私を招待したのは新邸を見せるためよりもむしろ彼女を見せるためであつたにちがひない。そのとき狹間丈太はひととほり彼女との關係を說明したあとですぐ紹介しようと言つた。そのとき私と彼とは新邸の應接間に向ひあつてゐたのである。彼は女中が入つてくると川瀨クミ子を呼ぶやうに命令した。まもなく彼女が入つてきたのであつた。川瀨クミ子は確信にみちみちた態度で、私と狹間丈太が向ひあつてゐるテーブルの前までくるとひよこんとお辭儀をし、それからすぐに橫の長椅子に腰をおろした。平つぺたい顏の輪廓が將棋の駒のやうに角ばつてゐるのが落ちついたかんじであつた。それに大きい口と前へつきだしたうすい顎とが一種言ふべからざる調和を保つて猿のやうな敏捷さにみちみちてゐたのである。狹間丈太は絕えず彼女の方に微笑みかけながら、新聞記者時代の彼女は男の記者が十人がかりでやる仕事を一人でやりとほしたとか、だから彼女がもし東京へ出てヂヤーナリストを志願するのであつたらたちまち一世を壓倒するにちがひないとか、ある有名な婦人思想家がN市へ講演にやつてきて彼女の質問にたぢたぢとなり、ろくろく返答もできずに引さがつたとか、さういふ實例や意見を幾つとなく述べ立てたのであるが、しかし、そんなときにも川瀨クミ子は自分がほめそやされてゐるといふことにいささかのひけ目もかんじてはゐないやうに見えた。彼女はまつ毛一本うごかさずにぢつときいてゐたあとでおもむろに口をひらき、いやあのときはああだつた、あのときはかうだつたと狹間丈太の說明のいたらぬところをながながと補足するのであつた。それが最初のうちは妙に小面のにくいかんじだつたが、だんだんきいてゐるうちに自然な氣やすさがわいてきて、しまひにはうれしさうな彼女の顏にはいつのまにか角がとれて、いかにも善良でのどかなかんじに變つてしまふのであつた。池田秋月と彼女との關係も彼女の新聞記者時代に生じたもので秋月が何かの講演會の催でN市にやつてきたときに彼を訪問したのが最初のきつかけだつた。それからしばらく手紙の往復がつづいてゐたが川瀨クミ子が狹間の家へ住むやうになつてからこの熱情詩人の心は彼女の方へぐいぐいとか

たむいてきたらしい。これはあきらかに戀愛關係と言はるべきものであつたが、しかし、たとへ池田秋月から彼女のところへ屆いた手紙の文句にどんな熱情があふれてゐたとしても狹間丈太はそれがために川瀨クミ子を疑ふやうなことはなかつたのである。何故かといつてそのやうな精神的な情愛なぞといふものはどんなに熱烈なものであつたにしても、否、熱烈であればあるほど彼にとつては彼と彼女との肉體的調和を豐富にすることに役立つだけのものにすぎないところのものであつたからである。それがために彼は少しも不幸にはならなかつたのである。このことは狹間丈太が女にかけてどんなに强い自信をもつてゐる男であるかといふことを證明するに足るものであらう。しかし、ある晩、池田秋月は非常な決心をもつてN市へやつてきたのである。彼はN驛のちかくにある宿屋にとまつてゐたが、狹間丈太はそのことを川瀨クミ子に屆いた手紙によつて知ると彼女の外出を禁じてしまつた。その上で、こんどはあらためて秋月のために一夕の宴を設けて招待しようとしたのであるが、秋月はきつぱりと彼の申出をことわり、それからは一日に何回となく川瀨ク

ミ子に對して電話や手紙で誘ひをかけてくるのであつた。狹間丈太はそのたびごとに全身の血管が煮えかへるやうな敵意をおぼえた。彼はそのとき、川瀨クミ子にちかづいてくる秋月の肉體をありありと感じたのであらう。彼の神經は川瀨クミ子の一擧一動にあつまり、彼は家ぢゆうの隅から隅まで心をくばらずにはゐられなくなつた。彼女はたつた一ぺんだけ秋月に會ふことをゆるしてくれと哀願したがそれさへもゆるされなかつた。彼女が電話口へ出ると、彼女のうしろには同じ受話器にぢつと耳をよせて狹間丈太が立つてゐるのであつた。彼の耳は秋月のささやきを一つ一つきゝ洩らさなかつたのである。それ故、彼は川瀨クミ子が電話口からはなれると、急に嚙みつきたいやうな情感を覺え、彼女の×××××××××××××××××××××××××××××××。それから狹間丈太は×××××××、×××××た彼女にわざわざ池田秋月のところへ電話をかけさせ、自分はもうあなたにお會ひする氣持をうしなつてゐるので、これからは決して電話をかけてくれないやうに、と、おろおろ聲で言はせるのであつた。すると秋月の聲が受話器の中でと

げとげしく高まつてきて、ぢつと耳をすましてゐると狭間丈太は胸がすくやうな氣もちになり彼女への情熱が次から次へと湧きかへつて次第に底の知れないやうな世界へ落ちこんでゆく自分を感じた。ある夜、（それは秋月がN市へやつてきてから三日目であつたが）狭間丈太は夜中に彼の寝室で眼がさめると、彼の横に眠つてゐる筈の川瀬クミ子の姿が見えなかつた。彼はとび起きるとすぐこつそりと階下へおりていつた。そのとき彼女は平常着に着かへて裏から出てゆかうとするところだ。だが一足の差で狭間丈太に見つけられたのである。狭間丈太は寝室に電燈をつけ、その下にぶるぶるふるへてゐる彼女を立たせてたんねんに身體檢査をはじめた。すると帶のあひだから小さく折りたたんだ手紙が出てきた。彼はどつと泣き伏した彼女の小さい身體を膝の上へ抱きあげて、あやすやうにしばらくゆすぶつたあとで、ゆつくりと手紙を讀みはじめたのである。「この手紙が君の手にとどいたら着のみ着のままで出てきてくれ、わが妻よ、もし君が來られなければわれわれはもう永久に相逢ふ日はあるまい」

一氣に讀み終ると、夜はもう更けてはゐたが狭間丈太はすぐ秋月のゐる宿屋に自分で電話をかけ、「手紙は拜見したけれどもゆくわけにはゆかぬ」といふ言葉を秋月のゐる宿の女中に川瀬クミ子の言葉としてつたへさせたのである。すると反應はみるみるうちにあらはれた。夜中に門を敲く音が聞え、玄關のベルが高く鳴つた。池田秋月が悲壯な決心をして乘込んできたのである。

そのときの情景を狭間丈太は何の恥づるところもなく確信にみちみちた態度で、こまごまと私にはなしてきかせるのであつた。彼は池田秋月を二階の客間へとほすと自分は襖をへだてゝすぐとなりの部屋に坐り、眼を瞑ぢて秋月の聲に耳を澄ました。彼は人間の心からにじみでてくる眞實の聲といふものは顏を見てゐたのでは表情の變化にさまたげられて決して聞かれるものではないと言ふのである。彼はさういふ大仰な構へ方によつて相手を威嚇する術を心得てゐた。そのとき、池田秋月は非常に昂奮した態度で狭間丈太のやり方は卑怯であると叫んだ。たぶん彼は酒に醉つてゐたせゐでもあらう、それから自分はもはや彼女なしには生きることのできな

いほど苦しんでゐるといふことをくどくどと述べたてたあとで、川瀬クミ子は貴君がどのやうに束縛しようとしてももはや自分のものであると言ひきつたのである。それから襖越しにすゝり泣く聲が聞え、池田秋月は何の挨拶もなく立ちあがるとよろよろと階段の方へあるいていつた。

「お待ちなさい」

と、狹間丈太はそのすぐあとから呼びかけた。（さういふはなしを私にするときでさへも、彼の唇には絶えずうす氣味のわるい冷笑が漂つてゐた）彼は相手が立ちどまるのを待つてから落ちついた低い聲で、自分は貴君がもつとりつばな魂をもつた詩人であると考へひそかに尊敬の念をよせてゐたが今こそはつきり貴君に對して心から憎惡を抱かずにはゐられぬ、自分は場合によつては川瀬クミ子を貴君の手にまかせてもいいと思つてゐたのである、しかし、今となつてはさういふ氣もちは一掃された、貴君の行爲はことごとく好色不逞の不良少年のなすところにひとしきものである、——と言ひ終ると、判決を言ひわたした裁判官のやうにそのまゝ席を立つて彼のゐた部屋から廊下越しにつづいてゐる寢室に入つていつた。その寢室の蒲團の上で川瀬クミ子は苦しさうに身悶えしながら泣きつゞけてゐるあひだ狹間丈太の顏が毒々しい誇にあふれてくるのを見彼がその話をつづけてゐるあひだ狹間丈太の顏が毒々しい誇にあふれてくるのを見逃すことができなかつた。彼は川瀬クミ子を完全に自分の心に、いや心ではない肉體にひきもどしたといふよろこびをかくすことができなかつたらしい。だからこそ川瀬クミ子のゐる前でそのときの情景を一つ一つ露骨な言ひ方で思ひだすにまかせてしやべりちらすのであつたが、そんなときにも川瀬クミ子の顏にはみるみるうちに得意さうな感じがうかび、それが何時の間にか彼への媚情となつてあらはれてくるのだつた。私は池田秋月がこの女のために苦しんでゐたのかと思ふだけで、この一ぺんも會つたことのない詩人に對して輕侮の念をおこさずにはゐられなかつた。それ故、數日間經つて私は秋月の自殺を報じた新聞を手にして彼の死の前日まで行を共にしてゐた若い女性があつたといふ記事を讀みながらも、しかしそれがクミ子であるとは夢にも考へなかつたほどである。（新聞の報道では、それはかくれた女

として大へん曖昧な書きかたをされてゐたせゐでもあるが――）

その女がいよいよ川瀬クミ子であるといふことがわかつたのはN市にゐる狭間丈太からその頃私の住んでゐたYホテルへ長距離電話がかかつてきたからである。それは秋月の自殺がつたへられてから二三日經つてからであるが、私は夕方から飲んだ酒で何時になくぐつすり眠つてゐるところを氣魂ましい室内電話のベルの音によつてたたきおこされたのである。受話器を耳にすると狭間丈太のせきこんだ聲が聞えてきた。

「今からすぐ來てもらへないかな」

「今から――」

やつと深い眠からさめたばかりのうつろな頭へ、とげとげしくいきり立つた狭間の聲がぢりぢりと迫つてきたのである。「終列車で來てくれれば二時には着くよ、驛にはよくわかるやうに迎へを出しておくからどうしても來てもらひたいんだが」

「だからさ、それが今夜でなけりやならんといふのは？」

「氣持の上に、――」

言葉がぐつと咽喉につまつて、「一刻の猶豫もないんだよ」

「何のことかね」

「それが……」

電話が急にかすれ、言葉が一つ一つきれぎれにもつれて、ヂ、ヂ、ヂ――と、鼓膜をゑぐるやうなひびきがひろがつてきたと思ふと、こんどはだしぬけに大きい聲になつて狭間の顔がちかぢかと私の眼の前にぼうつとうかびあがつた。「君は池田秋月の死んだことを知つてゐるか？」

「うん、ぢやあ、あの池田秋月の」

「さうだよ、そのことなんだ、それについて何も君にどうしてくれといふわけぢやない。僕には僕の判斷があるからね、唯、その前に君に會つて自分の氣持に安心を持ちたいんだ、だから――」

「よし」

と、私は威勢のいゝ聲で答へた。「ぢやあ行かう！」

「きつと來てくれるね」

「きつとゆくよ」

彼がこんなにくどくどと念を押すところをみると狹間丈太はよほどまゐつてゐるらしい。そのときほど私は川瀨クミ子の存在をはつきり感じたことはなかつた。これは私がN市に着いてからわかつたことであるが、池田秋月の自殺のかげにかくれた女が川瀨クミ子であるといふことが知れるとその地方の新聞は彼女の寫眞を大きく掲げて狹間丈太の家庭生活の暴露をやりだしたのである。彼がN縣の政治界に一つの惑星として隱然たる勢力を持つてゐただけに狹間丈太をやつつけるには彼の政敵にとつてこれは絶好の機會であつたとも言へやう。しかし、當の狹間丈太はそのかくれた女が川瀨クミ子であるといふことを彼女の寫眞が出るまでまつたく知らなかつたのである。彼がそのことを知つてゐたらたぶんこれほどおどろきはしなかつたであらう。それがために彼はまつたく虚を突かれたかたちになつた。この不意うちの

ためにこの事件は彼女を信じきつてゐる彼にとつてたちまち二重三重の惱みとなつてのしかかつてきたのである。しかし、川瀨クミ子は池田秋月との精神的な交渉についてはその後も彼をあざむいて手紙の往復をつづけたといふ事實を告白したが肉體的な關係だけは最後まで否定してがんばりとほしたのであつた。それが狹間丈太をますますやりきれない氣持にしてしまつたらしい。といふのは彼はさういふゆきがかりになつた男女の心の動き方については自分の判斷を少しも疑ふ餘地がないほど絶望的になつてゐたにもかゝはらず、しかし、今となつては世間に對する感情の中で無理矢理に川瀨クミ子の言葉をそのまま信じきつてしまひたいやうな氣持の方にかたむいてゐたからである。ところで私がN驛に着いたのはその夜二時少し前であつたがプラットホームには彼の家の書生が眠さうな眼をきよろつかせながらしよんぼりと柱にもたれかかつて待つてゐた。やがて驛の前に待たせてある自動車が郊外の彼の家に向つて走りだした。すると私の頭には何とも知れずうきうきした感情があふれるやうに湧いてきた。そして、一種名狀することのできないすがすがしさの中

で私は彼がこんなときに私をおもひだしたのは私が彼女の貞操を審理するのに適當な判斷をもちあはせてゐるにちがひないと考へたためではなく池田秋月によつてあたへられた侮蔑を私によつて幾分でもとりもどさうとするがためであらうといふことを想像した。すると、得意さうに秋月との交涉を話したときの彼の顏が思ひ出されて、ざまを見ろ！　といふ氣持になつたのである。六月のはじめであつたが、夜氣は妙にうすらさむく、狹間丈太は二階の居間でむつつりと口をつぐんで壁にもたれかかり、その前に低いテーブルをへだててちよこんと坐つてゐる川瀨クミ子の姿は痛々しいと思はれるほど哀れにやつれて見えた。

テーブルの上には一葉の新聞がひろげられ、そこには「おろかな白鳥」といふ題の秋月の絕筆の詩篇が揭げられてゐる。その詩のところどころには赤鉛筆で線がひかれてゐたが、狹間丈太は、——

「さア、これだ」

と言ひながら赤鉛筆でしるしのついてゐる部分を人さしゆびでおさへ、それを私

の方へ示して、低い聲で讀みはじめた。

「もう死にたくなくなつたでせうと
あのたのしい一瞬に女は云つた
そのときで身は死んだ
君に殺され、君を殺し、
その死は生につながる死
見ずでやむべき夢であつたか。
見た、見た、見た、
見たのちはたゞに忘れて
のこりなく身にゆだねて
そののちにまこと死ぬ身を
ひとり死ぬわれとは知らず

いや青やかに、いやにこやかに
君はいのちによみがへる、――」
それだけ讀み終ると彼は私の顏をぢつと見つめながら、
「此處だよ、もう死にたくなくなつたでせうといふ言葉の裏にはつきり二人の肉體關係が暗示されてゐるぢやないか、こいつは（と、とげとげした眼で川瀨クミ子を睨みするて）どうしても肉體はゆるさなかつたと言ひはつてゐるんだがね、君の解釋はどうだ？」
「さア――」
と私は思はずたぢたぢとなりながら、しかし心の底では何とか川瀨クミ子を救ひあげてやることのできるやうなうまい言葉を考へ出さうとあせつてゐるのである。だが、私の視線がその詩篇の一節にそゝがれてゐるあひだに川瀨クミ子が不意に顏をあげた。
「だから、さつきから何べん言つてゐるか知れないぢやないの、――あたしは唯、あのひとを氣の毒に思つてゐるだけなのよ、だから接吻だけをやつとゆるしただけぢやないの、それをあのひとはこんなに誇張して」
「おい！」
と、狹間丈太が机を一つどかん！　と敲いた。川瀨クミ子はびくつとしたやうに肩を顫はせたがそのまゝだまつてうつむいてしまつた。
「お前は默つてゐろ、――いゝか、さアこゝにかういふ文句があるぞ、魂消る消耗のあとに、さむることなく眠らんとて、君を得たと君は知らぬ、こんな猥褻な感情をムキ出しにした文句があるか、魂消る消耗とは何のことだ、あゝ今になつて」
狹間丈太は苦しさうに唇を噛んだ。「おれはお前が秋月といつしよに死んでくれてゐたらどんなによかつたかと思ふぞ」
「だから、あたし」
と、川瀨クミ子は今にも泣き出しさうに口をゆがめて、
「どんなことでもあなたの氣のすむやうにして下さいと言つてゐるぢやないの、孤

山であのひとが泊らうと言つたときも、あたしは何べん厭だと言つてことわつたか知れないわ、それはね、あなたをだましてゐたことはよくないと思ふけれど、あたし今度こそあのひとにきつぱり言つてやつたのよ、あたしだつてもう身をかためなくつちやならないんだし、こんな子供の火あそびみたいなことをいつまでもしてはゐられないぢやないの」

「ぢやあ」

と、私はこみあげてくる感情をおさへながら針をふくんだ聲で言つた。「池田秋月はあなたに死ぬことをうちあけたんですね？」

「えゝ、——それは」

彼女は悲しさうに眉をふるはせた。その眼は極度の不安におびえてゐるやうに見えたが、すぐにおちついた靜かな聲で、

「さうですの、——あのひとは前にも」

さう言つてからぢつと眼を俯せた。それから急にほそぼそとした聲で、ほんとはN市の停車場でひと目見てわかれるつもりだつたのが、そのとき池田秋月はすでに二人分の切符を買つて持つてゐたこと、菰山の宿へ泊つてからも自分はわざわざ女中にたのんで秋月のとなりの部屋に蒲團を敷いてもらつたこと、秋月が夜中にやつてきて自分の首に手をかけたので慌てゝとび起きたこと、——そして、ああ、あのときほど自分はあのひとの顏がみすぼらしくうす氣味わるく見えたことはなかつたと深い溜息を吐きながら、それでも、ふたこと目にはあのひとが死ぬ死ぬといふのがおそろしく到頭接吻だけをゆるしてしまつたが、そのあとで、いそいで袖でこつそりと唇をぬぐひ去つてその夜はまんじりとも眠ることができなかつたといふことを、一つ一つの場面の情景をうきだすやうに話すのであつた。話し終るまで彼女は顏をあげようとしなかつた。それが私の眼には彼女の胸の底にしつかりと用意された言葉をかすかなあやまちもなく言ひきつてしまはうと努力してゐるやうに見えたのである。しやべつてゐるうちに彼女の言葉にはだんだん力がこもつてきて、次第に自分の言葉に唆しかけられながら秋月がどんなに低劣なやり方で彼女を死に誘ひ

こまうとしたかといふことまではなしたのである。その言葉をだまつてきいてゐるうちに私の頭には彼女の塗りつぶした感情の底にひそんでゐる現實のすがたがあざやかなかたちをとつてうかびあがつてきた。その數日前におそらく彼女が池田秋月の前で示したであらうと思はれる情熱はあとかたもなく消えうせて、唯、生きようとあせりぬいてゐる人間のおのれをまもるための慘ない努力が生きるためのきづなを失ふまいとする低い僞瞞によつてますます彼女を醜いものに思はせるのであつた。しかし狹間丈太はその言葉によつてだんだんおさへられていつた。「この嘘つきが」と彼もまた腹の底ではさう思つたにちがひないであらうが、しかし彼は長いあひだの事業家生活の經驗から一つの嘘を他人にしつかり眞實だと思ひこませるためには先づ自分でさう思ひこまねばならぬといふことを知つてゐた。それ故、狹間丈太と川瀨クミ子とはこのときそれぞれ生きぬけようとする感情の頂點において結びついたと言ふべきであらう。彼にとつて憎むべきものは川瀨クミ子ではなく池田秋月であつた。川瀨クミ子の貞操についての疑ひは、どんな方法によつてもぬぐひ去

ることができるのだ。だが、あの青二才にしてやられたといふ感情はどうしてぬぐひ去つたらよいであらうか。狹間丈太はしばらくぢつと腕を組んで考へてゐたが、やがて何時ものほがらかな調子にかへつて大聲に笑ひだした。

「もう止さう、こんなことで狹間丈太が苦しむなんて」

それから、テーブルの下から小さい風呂敷包をとりだしてその結び目をとき、中には先づ自分でさう思ひこまねばならぬといふことを知つてゐた。それ故、狹間丈太は今日ほんたうに決心してゐたんだよ」

彼は私の方をちらつと見てから、急に川瀨クミ子の方を向いた。烈しい調子を含んだ挑みかゝるやうな聲であつたが、それにもかゝはらず彼は何とも知れず見とほしのついた感情の中に落ちつきすましてゐるやうであつた。それから彼は得意さうにニタリと笑つてみせたのである。「どうだい、わかるか、お前に？」

「えゝ、——わかるわ」

川瀨クミ子の眼があたらしいうるほひを湛へてかゞやきだした。それはこみあげ

てくるよろこびをどうにもかくしきれないでゐるといふ風に見えたのである。

「でも」

と、彼女が全身でしなだれかゝるやうな感情をこめて言つた。「そんなもの、ほしいと思はないわ」

むろんかういふ會話の中に私の入つてゆく隙はなかつたのである。彼女の眼には愛人の死顔のかげからすべりぬけてきたといふ悲しみはどこにもなかつた。此處には唯こつそりと死をぬすんできた女があるる。そして彼女の飽くことを知らぬ情慾が今、狹間丈太の肉體に對してゞはなく眼の前の紙幣束に對していきいきと燃えさかつてくるのが見えるやうであつた。

記憶

萱の小笠に竹の杖、行雲流水の旅すがたで老尼僧の性覺さんが東京見物にやつてきたのはもう十年前である。その頃、私は谷にかこまれた郊外のM村で母と妻と三人でくらしてゐたが、性覺さんは餘生の乏しさを切實にかんじたものと思はれる。生前にせめて母との名殘を惜みたかつたのであらう。田舍ぐらしの閑かさが老僧の表情にしみついてゐた。その顏は私の少年時代には年配不相應に老けて見えたが、しかし今はそのかんじが逆になつて彼女の顏には年をとつたあとが少しも殘つてゐなかつた。それが私の心に子供の頃の記憶を呼びおこすのであつた。性覺さんの額の上に小さい瘤ができてそれがだんだんふくれてきたので私は不安でならなかつたことがある。小學校に入つたばかりの頃だつたと思ふ。私はその瘤が今にきつと角になるにちがひないと思つたのである。性覺さんが何かの化身のやうに思はれ、そ

のことを當の本人である性覺さんが知らないでゐるのが可哀想でならなかつた。私はそれをどうして知らせやうかとして苦心してゐたのである。ある日、何かの機みであつたか到頭そのことを言つてしまつた。

「性覺さん、あんたの額に角が生えるよ」

今でもおぼえてゐる。そのとき彼女は三十前後であつたらうか、柔和な顏つきが硬ばつたやうになり口を噤んだまゝで横を向いてしまつたのである。それは彼女が私に對して示したはじめての表情であつた。私は悲しさが急にこみあげてきて家へ走つてかへつてきた。いよいよ性覺さんは鬼になるぞと思つたのである。その祕密を知つてゐるのは自分だけだといふ氣がした。私はそのことを誰にも言はなかつた。その瘤が六十ちかくなつた彼女の額の上に昔のとほり殘つてゐるのである。ぢつとしてそれを見詰めてゐると私の回想の中をきれぎれの風景が通りすぎる。彼女の住んでゐた尼寺は沒落した私の鄕里の家の地つづきにあつて、性覺さんはこの尼寺の初代の庵主である私の伯母（父の姉）の弟子だつた。その伯母は私の產れない

前に死んでしまつたが同族の中に進んで剃髮しようとする人がゐなかつたので性覺さんが二代目の庵主になつたといふ。廣い尼寺の庭の隅には古さびた小さい五重の塔がそびえ、そのぐるりには大きな枇杷の木が五六本枝を大きくひろげてゐた。その庭に面した本堂のひよろ長い緣側が私の遊び場所の一つであつた。枇杷の實が色づくころになると私は毎日のやうに出かけていつた。性覺さんが端然として念佛を唱へてゐるうしろに私も同じやうにきちんと坐つて木魚を敲いてゐたのである。午後の陽ざしの中に木魚の音がゆるく溶けてときどき視野をかすめる枇杷の實の青い色が私の食慾を唆るのであつた。勤行がすむと性覺さんは緣側で遊んでゐる私のところへ佛に供へてあつた乾菓子を持つてきてくれた。尼寺の裏の藪をぬけると遠い山が見え、藪の前の小さい池は五月になると蛙の聲で埋つてしまふのであつた。

「性覺さん、まだあんたの額には瘤があるねえ」

「ふんとに、――」

性覺さんがそつと額に手をあてた。「ようく覺えておいでやすなも」

彼女の聲が孫をあやすやうなやさしさに變つてきた。柔和な皺が眼のふちにうかんだ。何の先ぶれもなしにやつてきたこの珍らしい訪客のために家の中には小さいさわぎが持ちあがつたのである。もつとも狼狽したのは母だつた。先づ佛壇を用意しなければならぬ。母はあくる朝の勤行に間に合ふやうに夜のうちにこつそり買つてきてくれと賴むのであつたが、しかし、佛壇屋はあつても持ち合せの金で買へさうな佛壇はなかつた。母は戸棚のおくにしまひこんであつた一族の位牌をとりだし簞笥の上に順序よくならべた。私は郊外の村に住んでゐる友人の家をひと廻りしたがだれも佛壇を持つてゐるものはゐなかつた。次の朝、窓をうつ雨だれの音に眼をさますと私の耳に忍びやかな木魚の音が傳つてきた。しづかな、心の澄みとほる氣もちだつた。しめつた大氣をすべつて庭を隔てた母の部屋から聞えてくる木魚の音に耳をすましてゐると過去のおもひでがぼうつと私の頭にうかんでくる。うす暗い母の部屋では簞笥の上に燈明があがり、母と性覺さんとがならんで珠數をつまぐつてゐるのであつた。午後から妻が傘をさして性覺さんといつしよに淺草へ行つた。夕

方くつしよりとぬれてかへつてきたので、つれだつて錢湯へ出かけたが、流し桶の前にしやがんでゐる性覺さんのうしろから三助が背中をながすために彼女の膝の上にあつた手拭をとりあげると、彼女はびくつとして肩を顫はせながら、

「何をなされる、こ、これはわしの手拭ぢやがな」

と怒鳴つたさうである。三助が彼女の眼には無禮な闖入者に見えたのであらう。夜は性覺さんをかこみ、みんなで精進料理を喰べた。性覺さんは箸を持つたまゝでぽつぽつと思ひだしたやうに鄕村の人たちの噂ばなしをはじめた。昔私の父親が世話をしたことのある製絲業者が今は一代の分限者となつて全村に君臨してゐる。私の小學校時代からの友人であつたある企業家は小さい事業に失敗したゝめに家屋敷をすつかり借財のために提供しなければならなくなり今は彼の父母である老夫婦が村はづれの小さい家を借りて煎餅を燒きながらしがない暮しをしてゐる。私の少年時代に村長として幅を利かしてゐた男はあるある犯罪事件のために數年前刑務所につながれた。性覺さんは記憶がうすれると天井を向いて何か考へるやうな恰好をした。

そして彼女のきれぎれのはなしをきいてゐるうちに私の心は次第に十年前の記憶の中へかたむいていつた。今まで自分とはまるで無關係のやうに思はれた村をめぐる變化がだんだん自分の生活にかすかなつながりを持つてゐるといふ意識にかへつてきたのである。

「そいでね、——あんたのうちの重作さん（亡兄の名前）も地藏さんにおなりになつたぞな、どうしても、あんたも一度おいでやさんといかんぞな」

だしぬけに性覺さんが私の顏を見た。

「どうして、——地藏さんに」

「重さんも生きとられたうちに、よう念佛をお唱へやしたでな」

淡々とした語調で何の感激も交へない性覺さんの聲である。十年前、村の三等郵便局長だつた長兄がピストルで自殺すると同時に彼の官金費消罪がばれて一家は沒落した。郵便局にあてられてゐた私の家はそのまゝあたらしい局長の住宅になつたが、一年足らずのうちにあたらしい局長は熱病で死んでしまつた。次の局長も同じ

やうにそこに住んでゐるうちに彼の妻はあるとき屋根の上の物干臺からころげ落ちてびつこになつた。彼の子供は長い病氣のために入院しなければならなかつた。前の局長が死んだときにも兄の亡靈が祟つたのだといふ噂が立つたが引きつづく災厄のために次の局長はすつかりまゐつてしまつたらしい。そこで、ある神官に伺ひを立てると、浮かばれぬ亡靈が庭の椋の木の中にひそんでゐるといふ答が出た。局長はすぐに數人の樵夫を驅使して數百年經つたと言はれる大きな椋の木の幹を根元から伐り倒してしまつた。すると幹が大きな音を立てゝ倒れるときその切口から鋸で胴切りにされた蛇の死骸が出てきた。

そこまではなすと性覺さんは顏をしかめて、

「その蛇がなも、道ばたに拋りだされて長いあひだ動いとりましたぞな、そいでなも、その切株のあとに石の地藏さんをお立てになつてなも、今では毎朝拜んでおいでやすがな」

性覺さんはほつとしたやうに呼吸をついだ。「重さんも地藏さんにおなりやした

でなも、あんたもこんどはどうしても一ぺんだけおいでやすな」

屈托のないほがらかな聲で言つた。私は回想の中に張りつめてゐた陰酸な靄の一角が急にやぶれて次第に晴れてゆく快さにひたりながら、茫然として性覺さんの顔を見つめてゐた。

「さア、性覺さん、今夜はぐつすりおやすみなさい。あすは僕が東京見物につれてゆかう、先づ日比谷公園をひと廻りしてそれから自動車で上野へ行つて展覽會を見て、博物館へ入つて、動物園へ行つて——と、さうだ晝から行けば夕方までにはかへれるからな」

私はひとりではしやいでゐた。

平　俗

今年三十一歳の映畫說明者宇佐美春嶺は、三つになつたばかりの悴將吉の手をひいて狹い廊下をうろついてゐたが、やがておそる〳〵刑事部屋の扉をあけた。

「池袋からまゐりました宇佐美と申すものですが、係りの刑事さんはゐらつしやいませんでせうか？」

「誰に會ひたいんだ？」

五六人の視線が彼の方にそゝがれたが、ぶつきらぼうな聲でさけんだのは部屋の入口の扉とすれすれのところに彼の方へ顏を向けて、子供が木馬に乘るやうな恰好で椅子の上に馬乘りになつてゐる男だつた。

「山岡さんです」

と答へて春嶺が媚びるやうな表情をしてみせると彼は兩手でつかんでゐる椅子の

脊に力を入れ、それを春嶺の鼻先でぎしぎし鳴らしながら機みにまかせて身體を動かしてゐたが、

「山岡君は」

と言つてうしろをふりかへつた。「けさ早く來てゐたんだがなア？」

「學校の先生のところへ行つたんだよ」

と誰かの答へる聲が聞えた。

「さうか」

と、彼は春嶺の方を向いてにやりと笑つた。

「——もう少し待つてみろよ」

「は、ありがたうございます」

春嶺は丁寧に頭を下げて扉をしめた。今にも泣き出しさうに顔をゆがめてゐる將吉を抱きあげて、廊下を往つたり來たりしてゐると、そこへ昨日訪ねて來た山岡刑事がぬつと顔をだした。

「昨日は」

と、もぢもぢしながら笑ひかけると、

「やア」

と、相手は氣輕な調子でうなづいてみせた。彼は警察署の裏口からかへつてきたところらしい。ゴムの長靴を穿き片手に洋傘を持つてゐた。

「そこらでちよつと待つてゐてくれたまへ」

彼は早口にさう言ひ置いてから春嶺とすれちがひにせかせかと刑事部屋の方へあるいていつた。氣がつくと、彼のうしろから小柄な女が俯むきがちについてくるのであつた。足駄をはいてゐるが、やつと刑事の肩ほどの丈しかない女の横顔をちらつと見た瞬間、春嶺は『先生』だなと思つた。女給たちの仲間で通稱『先生』と呼ばれてゐる彼女も到頭やられたらしい。これでは事が面倒になるぞと春嶺は急にわが身に迫る危險をかんじながら彼女のうしろ姿を見詰めてゐたのである。燕脂色のコートを着て片手に洋傘を持つた彼女は刑事部屋の前までゆくとちらつとうしろ

をふりかへつた。あきらかに彼女も春嶺のゐることをみとめたらしい。絶望の色が彼女の瞳をかすめた。すると將吉を抱いた春嶺の指先がわなわなと顫へてきたのである。出頭命令をうけるときまで彼は『先生』のことは考へてゐなかつた。前の日の四時頃、彼の女房の多喜は何時ものやうに勤先である銀座裏の酒場『赤猫』へ出かけていつたがあくる日の午後になつてもかへつて來なかつた。前にも客とのドライブで夜あかしをしたといふ例はたびたびある。春嶺もうすうす彼女の行跡に不審を抱いてはゐたが、しかし、いかに時世時節とは言へ、かうなるのは自分の不甲斐なさからだと思ふと急に女房がいとほしくなり、操を賣つて操を立てるといふ彼の得意な劒戟映畫の説明文句にでもありさうな大時代の理窟を適用することによつて湧きかへる嫉妬をおさへつけてゐるのであつた。それ故、夜あけがたに彼女が手土産を持つてかへつてくると、この『不貞女が』といふ言葉がすぐ咽喉元までこみあげてくるのであるが、それをぢつとこらへてゐるのである。すると急に彼女が何の恥かし氣もなく醉漢にたわむれてゐる姿がぼうつとうかびあがり、それが心の顫へ

立つやうな情感を湧き立たすのであつた。みるみるうちに多喜の肉體に新鮮な魅力が加はつてくるのである。しかし、多喜はその日、夜が明けても歸らず、春嶺は將吉をあやして寢たり起きたりしてゐるうちにもう矢も楯もたまらなくなり、平常は彼女を待つてゐる氣もちをなるべく横へ外らすために、わかりきつたことでもわざわざ自分に都合のいいやうに空想して、退つびきならぬ朋輩づきあひで招伴をたのまれ、どこか遠くへ自動車で出かけたのが酒癖の惡い客にからまれてうまく座をはづすわけにもゆかず、思はず時間をすごしてしまつたのだと考へたりするのであつたが、夜が白々とあけてくると他愛もなく見知らぬ男に身をまかせてゐる多喜の姿だけがちりぢりと胸をしめつける憤りの中から無氣味な色彩をもつてありありと描きだされてくるのである。

「畜生！」

と、宇佐美春嶺は齒を喰ひしばつた。彼女の方から言ひ寄つた若い男と、どこかの安待合にしけこんでゐるのにちがひあるまい。春嶺はこの半月ばかり前に疲れきつ

た多喜が、眞青な顔をして歸つてきたときのことを思ひだしてゐた。あのときは『先生』と呼ばれてゐる同じ店の女給といつしよに二三人の客とつれ立つて大森の砂風呂へ出かけたのであるが、男が約束の金をよこさないといふので二人共謀の上、『先生』が馴染の男と添寢をする風に見せかけて男のぐつすり眠つてしまつた隙に羽織と金時計をさらつてかへつてきたのだといふ。金時計の鎖は春嶺が十六圓で質に入れて女房にわたしたが羽織はまだ押入の中にかくしてある。多少うしろめたい氣もちがしないではなかつたが、どうせ行きあたりばつたりの生活で、餘計なことは考へない方がいいときめてしまふと、良心の苛責なぞは露ほども起らなかつた。そんなことよりも今になるとその晩の多喜の素振りが妙にあやしく、床に入つてからしきりに腹部の苦痛を訴へてゐる彼女を見ると、彼は長いあひだ女房にかくしてゐた病氣が陽氣の變り目につれて惡化してきてゐることなぞを思ひ合せてわれ知らず胸をときめかすのであつたが、しかし、彼女の病氣も自分から感染したものではなく、どうやらそのときの不行跡の結果らしい。そんな風に考へてくると多喜の肉

體が病毒の巢のやうに穢らはしいものに思はれてくるのである。よし、おれだつて男一匹だ。たとひ今こそ日傭稼ぎの辯士であつても、五年前の淺草時代には若い女の手紙でズボンのポケットがはちきれさうになつたこともある宇佐美春嶺ではないか。彼は茶簞笥の上の置時計を眺めた。早くも九時四十分である。あと二十分——さうだ、あと二十分待つてやらう。きつかり十時までに歸つて來なかつたらどうするか見てゐるがいい。春嶺はざらざらの頰髭をさすりながら起きあがつた。そこへ表の戸を敲く音が聞えたのである。多喜かな、——と思つて息をころしてゐると、烈しく戸をゆるがす音がどうも平常事ではないらしい。春嶺は直感的にどうしても戸をこぢあけやうとしてゐる力の威迫をかんじた。慌てゝカンヌキをはづすと近所の交番にゐる制服の巡査の顏が覗きこみ、

「おい、もう十時だぞ」

と大きい聲で怒鳴るのであつた。巡査は一枚の紙切れをわたして流し眼に睨んだ視線に底意地のわるい冷笑を殘して歸つていつたのである。その紙切れには、『宇佐

美多喜ノ件ニツキ十一月五日正午マデニ出頭スベシ』と、印刷した活字とその上に鉛筆でなぐり書きにした文字とがごつちやにならんでゐた。『××警察署』といふ活字の横に係と書いた四角い欄があり、山岡といふ判が押してあるのを見て春嶺は前の日の夕方、多喜をたづねてやつてきた人の善さそうな刑事の顔を思ひうかべた。そのときは銀座の店のことについて訊きたいことがあるといふのであつたが、ちやうどその日の朝、彼女は同じ店に勤めてゐる『先生』のほかの女といつしよに主人同道で、エロサアヴイスの件につき同じ警察署へ出頭したあとだつたので山岡刑事はそのまゝ十分ちかく無駄ばなしをしてかへつていつた。彼は淺草にゐた頃の宇佐美春嶺を知つてゐて、今日のやうな活辯凋落期にめぐりあつた春嶺に心から同情してゐる樣子であつた。その山岡刑事の係であることが多少彼を安心させるのでもあつたが、どつちにしてももはや操を賣つて操を立てるどころのはなしではない。多喜の身邊に何か變事が起つたにちがひないのである。春嶺はやつと眼をさましてわめくやうに泣き出した將吉を膝の上に抱きあげ、昨夜喰ひ殘したまゝの餡パンを二

つに割つて兩方の手に握らせながら、『からす、からす何故なくの、からすは山に』と、口のさきで拍子をとつてゐるうちに、不吉な豫感が次々と彼の頭に沁みるやうにひろがつてきた。どうしたのかな、ことによつたら昨夜例の一件でやられたのかも知れないぞ。しかし、さうだとしたらすぐ出頭命令が來る筈だ、まさか翌日になつて出頭しろといふことはあるまい、ことによると待合で臨檢にでもひつかかつたのかな、それとも、いや、あけ方に自動車でかへつてくるところを、不審訊問でやられて言ひわけが立たず、ひと晩とめられてかへされることになり、その引取人として出頭を命せられたにちがひあるまい。もし例の一件で呼出されるとしたらまさかこんな緩慢なやり方はしないにきまつてゐる。やつぱりあのことではないらしい。春嶺の考は結局同じところを低徊してゐるのであつた。大難は小難で逃れるとすれば、これに越したことはないと春嶺はわれとわが心に機みをつけるのであつた。彼は四五日前に多喜から別の店で働いてゐる仲間の女給が、看板になつてから客とドライブするために自動

車に乗りかかつたところをつかまつてひと晩とめられたといふはなしを思ひだした。例の一件でさへなければ臨檢であらうと何であらうとおそるるところはないのであつた。しかし、その考は『先生』の顔を見た瞬間から變つてしまつたのである。宇佐美春嶺は將吉をあやしながら廊下をあるいてゐるうちにだんだんぬきさしのならぬ氣もちになつてきた。さうだとすると一體どうなるのかな、いやどうなつたつて構ふものか、おれは最初から事情を知つて質へ入れたと言つてやらう、生半可な嘘を言つたところで結局行きつくのは同じところだからな。彼は廊下の隅に置いてある長椅子に腰をおろした。刑事部屋の方から女のすゝり泣く聲が聞え、そのあとでぴしやりと平手で頰ッぺたを敲く音が彼の神經をおびやかすやうに傳つてきたのである。宇佐美春嶺はわくわくとする胸さわぎを覺えてきた。いよいよ『先生』がやられたらしい。彼女が刑事部屋へ入つてからやがて一時間ちかく經つてゐるのである。してみると、ねたがすつかりあがつてゐるのに彼女はうまくすり抜けやうとしてゴマ化したものにちがひないと春嶺は思つた。どうもあそこでぴしやりと

やられるのはいい恰好ではないからな。彼はやうやく眠りはじめた將吉をゆすぶりながら、おれは洗ひざらひ言つてやらうと自分を唆しかけるのであつた。そこへ、刑事部屋の扉があいて彼女の姿がすうつとあらはれた。『先生』はコートの袂で顏を掩ひ胸の上まで首をたれてゐるので痩せた身體が前よりも一層小さくみすぼらしく見える。彼女は春嶺の方は振向かうともせず反對側の留置場の方へ山岡刑事に追ひ立てられるやうにあるいていつた。まもなく、扉のしまる重苦しい音が彼の耳を壓するやうにひゞいてきたのである。

山岡刑事はすぐに引つかへしてきて、

「やア、ずゐぶん待たせちやつたね、こつちへ入つてくれたまへ」

と、元氣のいい聲で、刑事部屋の横にある小さい部屋の扉をあけた。三疊ほどの部屋で隅の方にテーブルが一つとその前に椅子が二つ置いてあるきりだつた。その一つを春嶺にすすめてから自分の椅子だけうしろの壁の方へずらし、

「實はね」

と言ひながら口にくわえたバットに火をつけた。「細君のことについてなんだが知つてるだらう、昨日君のうちへ行つたときにも大體見當はついてゐたんだ、決して理由なしに警察にとめやしないんだからね、默つてゐると警察は横暴だなんてことになるから君を呼んで話しておくんだ、それからこつちから聞かなきやあならんこともあるしね」

宇佐美春嶺は自分が特別の待遇を受けてゐるといふことにかすかな誇をかんじてゐた。そして、心ひそかに自分の淺草時代を知つてゐる山岡刑事としてみればかうするのが當然であらうと思ひ、今日の落魄した姿に對しても英雄的な昂奮を覺え、あゝ昨日は夢今日はうつゝ、ありし日の榮華のあとや今はいづこ、とかつて彼が大向を唸らせた名調子が頭に泛ぶのであつた。

「そこで――」

と、山岡刑事が膝を乘り出した。「お會式の晩なんだがね、あの晩細君は歸らなかつたらう？」

「えゝ」

「何時歸つた？」

「さうですね、――明けがたの」

「八時頃か？」

「いゝや、五時頃だつたと思ふんですが」

「五時頃、――さうか、で、家をあけられたんでむろん君は面白くなかつたらう、細君は何と言つて歸つた？」

「お會式で夜あかしの店が多いと言つてゐましが、しかし、僕は……」

「なるほど、お會式だからな、それもさうだが、實はかうなんだ、あの晩はもう一人の女、ほら、さつきの……」

「先生ですか？」

「知つてゐるんだね、藤野よし子と言つたね、あの女は」

彼はテーブルの上のうすい書類をぺらぺらとめくつてから、

「あの女と二人で酔つぱらひを釣つて大森の待合へ泊り、その家で客の金時計と羽織を盗んだんだよ、ところでその二品さへ出せば細君は歸れることになるんだが、その例の『先生』の居どころをどうしても言はないんだ。こつちではもうちやんとわかりきつてゐるんだからね、時計をとられた男はそのために氣の毒な立場に陷つてゐるんだぜ、なんでもとられた時計は上役のものを借りたといふんで早く品物が出ないと勤先をしくじることになるんだ、むろん君の細君にしたつて何も好んで人のものを盗んだわけぢやあるまいし、要するに君が失業して稼がなきやあならないから心にもないことをやつてのけたといふわけなんだらうから、君たちの立場には大いに同情はするが、——といつて同情ばかりもしてゐられないしな、それで、何處の質屋へ入れたい、品物は？」

「實は」

と、春嶺が唾液をごくりと呑んでからぺらぺらとしやべりだした。「時計も羽織

も私の家にあるんです。鎖だけは私が十六圓で質に入れました、その質札も此處にちやんと持つてゐます、あいつは馬鹿正直に相棒の『先生』から言はれたとほりに約束を守つてあのひとの住所をかくしてゐますが、ほんたうは『先生』が盗んで女房にわたしたんです、羽織は私の女房が盗んだものです、それからあのひとの住所は女房が苦心してさがしあてると月島の小學校の先生だつたさうです、あのひとが晝間はどこかへつとめてゐるらしいといふことは前の店にゐたときみんなで噂をしてゐたさうですが、何をしてゐるのかまつたく誰にもわからなかつたさうです、はつきりした居どころなんか、誰にも言はなかつたんですね、それを女房が自分でさがしあてたわけなんです」

「さうかね」

山岡刑事は眼をしばたたきながらするどい視線を浴せかけた。「一體どうして月島といふ見當がついたものかね？」

「見當ですか、——それはずつと前から先生が子供の唱歌のレコードを買ひこんで

ゐるといふことを聞いてゐたんで、そのときも、うちで私とはなしあつたことなんですがね、ことによると彼女は幼稚園の先生かも知れないなんて想像して、實は彼女の二足の草鞋とその努力主義を私は驚嘆もしまた禮讃もしてゐたものでした。そこで彼女の口ぶりで住んでゐるところが月島あたりらしいといふおよその見當がついてゐるところへ、店へやつてくる客が朝八時頃に『先生』が月島の渡しを渡つてゆくところを二三度見かけたことがあるといつたことや、それが何時も質素な身裝で袴をつけてゐるといふことを、その前に聞いた子供の唱歌のレコードのはなしとをりませて考へますとどうも月島あたりの幼稚園の先生にちがひあるまいと推測して探しにゆく氣になつたんです。すると歩いてゐるうちに託兒所が見つかつたのでたづねてみたんださうですが、そこではわからず、こんどは小學校をさがすことにしてうろついてゐるうちに學校がへりの子供の群れに會ひ、あんたんところの學校では唱歌のレコードを使ふかとたづねましたところ、使ふと答へたので、急に元氣づいて子供に教へられた小學校をたづねてみる氣になつたんださうですが、行つてみると案の定あのひとは一年生の受持の先生だつたさうです」

「さうかね、しかしへんだな、そんなに熱心に探しておきながら、どうしても知らないと言ひ張るのは」

「それがあの女のバカなところなんですよ、『先生』との約束を未だに守つてゐやがるんで、だが私の申上げましたことは」

と、春嶺は急に椅子から腰を浮かして嘆願するやうに眼をパチパチとうごかした。「寸分の僞りもないんですよ、もともとあの女があんなに夢中になつて『先生』の居どころを探さうといふ氣もちになつたのも納得のゆかない點があつたからなんで――」

「ところが君」

と、刑事は指の先でテーブルのはしをこつこつと敲きながら、

「警察ではそんな言葉が決して細君に對する有利な證言にはならないんだせ。細君があの女の行方を探しまはつたのは自分の安全を守るためには先づあの女に會つて

居どころを晦ます注意をするためぢやなかつたのかな。さうだとすると僕がいくら君に同情してゐたところでさうやすやすと放免するわけにもゆかなくなるんだが」

鼻の穴を上へ向けて山岡刑事はパットの煙を輪のやうに吹きだすのであつた。その言葉は宇佐美春嶺の胸にぴたり喰ひ入るものがある。彼は圖星をさされたと思つた。事實、多喜はこの四五日前から店の方へ姿を見せなくなつてゐる『先生』の身邊に何か危險のちかづいてゐることを豫感してゐたのである。『先生』さへつかまらなければ大丈夫だと考へるのも少々淺墓すぎるにしても、しかし彼女としてはそれも止むを得なかつたであらう。山岡刑事のはなしによると、多喜は二三日前の晩、看板になつて家へかへる電車の停留場の前に立つてゐるところを、ほかの刑事と同道でやつてきた被害者の一人に正面から呼びとめられたのだといふ。その晩は知らぬと言ひ張つてかへされたが、それも警察の方では相棒の『先生』がすぐつかまることを確信してゐたので先づ『先生』をつかまへてから實を吐かせやうと考へてゐたわけであるが、思ひのほかに『先生』の居どころがつきとめられず、それで昨夜いよいよ正式に多喜を拘引することになつたのである。しかし、あとからあとからと春嶺の知らぬはなしがほぢくりかへされてくると、どうやら彼の證言は多喜に對してもつとも不利な結果をまねくことになるらしい。

「それで――」

と春嶺は不安さうに眉を顰はせた。「今日何とか一つお願ひ出來ませんでせうか、何しろこんなものがついてゐたんぢやあ、私も稼ぎに出るわけにもゆかないし」

山岡刑事は小さい右の手を襟のはだけた春嶺の胸元へあてがつてぐつすり眠つてゐる將吉の顏をちらつと眺めて、

「ちよつと待ちたまへ」

と言ひながら立ちあがつた。もう夕方らしい。春嶺は急に脊すぢに傳はる惡寒におそはれた。身動きもしないで板の間に坐つてゐる多喜の姿が思ひだされてきたのである。そこへ山岡刑事が靴音を高く鳴らしながら入つてきた。

「どうも君」

と、彼は元氣のいい聲できめつけるやうに言ふのである。

「困つたことになつたよ、僕の腹ぢやあ何とかして今日かへすやうにしやうと思つてゐたんだが、今、相棒の『先生』がもう一つ六十圓の口を吐いちやつたところなんでね、こつちの方の取調がすむまでは出すわけにはゆかなくなつたんだ」

「六十圓の口ですつて、——いや、そいつは、まさかあの女が……」

「むろん僕もさう思ふんだがね、しかし、これも私情で裁斷するわけにはゆかんからな、まあ、せいぜい十日ぐらゐに思つておく方がまちがひがないな、なあに、十日だつたら僕が司法主任に情狀酌量を願つて七日ぐらゐにはまけてやるよ、だから、その前に君の方は大いそぎで家にある時計と羽織と、それから十六圓の鎖だけは何としても都合して請け出してくるんだね」

「さうですか」

春嶺はいかにも仕方がないといふ顏つきで頭を下げた。ことによつたらといふ像

感があつたので彼も懷紙とタオルだけは用意してきたのである。それを山岡刑事の手にわたして、

「では、何分よろしく」と春嶺はかすれるやうな聲を殘して外へ出た。風のつよい夕であつた。雲足の早い空に街の灯が風に吹きちらされて舞ひあがつてゆくやうに見える。街の辻々には『東北饑饉救助義捐金を募る』と大書したポスターが張られその前には群集のながれを睥睨しながら立つてゐる四五人の學生が交るがはるメガホンを持つて何か叫んでゐる姿が見えた。放心したやうに電車の停留場に立つてゐるうちに春嶺はふと數日前、同じ池袋の常設館につとめてゐる主任辯士の石切風來が、街へ出たら饑饉救助のポスターに出てゐる義捐金といふ文字に注意しろと言つた言葉を思ひだしたのである。ハハアと春嶺は一人でうなづいた。もう五十にちかい皺だらけの顏に白いちよび髭を生やして殊更若く見せやうとしてゐる風來の相貌が、同じやうに一日一日と敗殘の道を辿りつつある人間の味氣なさを感じさせる。彼は義捐の捐の字を勝手に損と讀み誤つてゐながら、「ねえ君、さうだらう、義に

よつて損をするなんてえ法はあるめえ、義によつて援助するんだからあれは當然義援金とすべきだね」と眞顏になつて叫んだのであつた。自分の識見に少しの疑念も抱かず、未だに、酒に醉ふと肩を怒らして、「かのトルストイは共產黨宣言において」とやりだす彼の姿ほど身につまされて佗しいものはなかつた。しかし、今はそんなことを考へてゐるときではない。先づ何としても女房を救ひだすために十六圓なにがしの金をつくらねばならぬ。來る電車も來る電車も乘客で一ぱいであつた。將吉が物におびえたやうに泣きだしたので宇佐美春嶺は、抱いてみたり、肩車に乘せてみたり、「からす、からす」と一つおぼえの歌であやしたてたりしながら、彼自身もまた今にも泣き出しさうな顏をして群集の中をあるいてゐるうちに、風に吹きちらされた砂埃が彼の鼻先に霧のやうにながれてきた。何か遠いところへ來てしまつたといふかんじである。一體、生きてゐるのか死んでゐるのかわからぬやうな境涯なのではないか。頭の中はかつて彼のはなやかなりし頃、滿場の觀衆が鳴りをしづめて聽き惚れた名調子の文句で埋つてゐる。これが落魄といふものであらうか。まるですべるやうにたどりついたさへ悲しみもなければ悔いもない。彼の心は今、多喜を力一ぱい抱きしめてやらうといふ氣持だけでみたされてゐる。電車通りに軒をならべてゐる夜店の前まできると將吉が背中の上から躍りだすやうに首をのばして、

「旗、——旗」

と、わめくやうに叫んだ。彼が慌てゝ抱きおろさうとしたときには將吉の小さい手がテント張りの軒をかざつてゐる小さい聯隊旗をしつかりにぎりしめてゐるのであつた。それがする〳〵と軒にくゝりつけた紐の結び目をぬけて將吉の手に殘つたのである。誰も見てゐるものはなかつた。宇佐美春嶺は素知らぬ顏をして背中の將吉をゆすぶりながら小刻みに群集の中をくゞりぬけ「あゝ無情」とサワリの一節を誦みながら砂塵の狂ひ立つ電車線路を突つ切つてあるきだしたのである。

石切風來

四十八歳の映畫說明者、石切風來は露地の入口までくると急に足音を忍ばせておそるおそる二階も下もまつくらで、軒燈だけが雨に濡れた格子戸を照らしてゐる。何時の間にか時間がすぎてしまつたのだ。電話がかかつてきたのは『天明俠客陣』の說明がはじまらうとするときだつたが、「ことによつたら駄目ぢやないかつて、——もしもし、わかりますか、先生がさうおつしやるんですが」といふ女房のみさの聲が耳に殘つて、勇ましい喧嘩の場面を說明してゐるときでも、不吉な豫想で胸が一ぱいだつた。言葉がとぎれるとうすら寒い部屋に今年三つになるマユミの寢てゐる枕元で眼を泣きはらしてゐるみさの顏がチラチラとうかんでくるのである。畫面は夜中になぐり込みをかけられた老俠客が半身不隨の身體で刀を杖に立ちあがるといふところだつたが、つめたく硬直してしまつたマユミの

小さな身體や、通草の實のやうにうすい紫色になつた唇の力なく顎へてゐるのが眼のさきにちらついてくると咽喉がしびれたやうになつて何を言つてゐるのか自分にもよくわからなかつた。墓口の中には二三圓の金しか入つてゐなかつたが、昨日前借をしたばかりで館主に泣きつく氣にもなれず、泣きついたところで相手にされないことはわかりきつてゐるし、ふと思ひついたのが昔の同業者で、今はポロ新聞記者をしてくらしてゐる北條天涯であつた。しかし來てみると、彼にしたつて暮しのいゝ筈はないし、妙なひけ目をかんじながら、せめて聲だけかけてゆかうと、おそるおそる格子戸のベルを押すと、まもなく二階の窓があいて天涯が顔をつきだした。

「何だい、——お前か、階下はあいてゐるせ、みんな留守だから、あがつてこいよ」

十五も年下の天涯の顔が若々しく見える。

「——今から、女房のところへ行かなきやならないんだよ」

「今から——？」

「あゝ、娘が危篤なんでね」

「そいつは大へんだ」

天涯は首をひつこめるとしばらく經つて階段を駈けおりてきた。格子戸があくと、彼は褞袍の上にしめた帶を左手でぎゆつと下におさへつけて、

「今から行くのかい——？」

「うん、終列車は十一時半なんだが乘りおくれると明日になつちまふからな、これからすぐ出かけやうと思ふんだが」

「それで——」

と、天涯はちらつとうしろをふりかへつて敷石の上にならんでゐる女の草履を見ると、ハツと氣がついたやうに横へずらした身體でかくしながら、

「錢はあるかい？」

「だから——」

風來の眼にもその草履が映つた。來てゐるな、と思ふと何か妬ましいやうな氣もちがもやもやと胸一ぱいにひろがつてきた。天涯は慌てゝにぎりしめた右手を風來の眼の前でひろげてみせた。皺くちやになつた五圓札が一枚ねつとりと汗ばんだ掌の上に載つてゐる。「そんなことだらうと思つてね、ちやうどよかつたんだよ、これで何とか間に合ふだらう？」

低い聲で、紙幣をわたすと彼は風來の肩を押すやうにして露地の入口の方へあるきだした。「寒い晩だな、——お前も風邪をひかねえやうにしろよ」

そつと道ばたへよつて煙草屋の時計を覗きこんでから「たつぷりあらあ」と言ひながら眼でにやつと笑つて引つかへしていつた。三月だといふのに雪模樣の寒い夜だつた。乘客のすくない電車は人影のまばらな街に高い響だけを殘して走つていつた。風來が川向ふの停車場に着いたときはまだ三十五分ほど間があつた。青いペンキ塗の柱が立ちならんでゐる停車場のホールはそつちこつちにうす黃色く電燈の光がしみとほつて、人の影が流れるやうにうかんでゐる。正面の大時計の振子がゆるやかに動くにつれて秒針のびくびくと顫へるのをぢつと見つめてゐると、死にかけてゐる子供の呼吸が聞えるやうだ。急に風が出たらしい。驛の入口でバスが大きな音を立てゝとまると信玄袋を抱へた十五六の小娘といつしよに、立てた外套の襟の下からぐるぐるに卷いた厚い襟卷をはみだしたまゝ、五十恰好の男が咳をしながらおりてきた。風來はうしろの壁にもたれて足踏みをするやうに下駄をカチカチと鳴らしてゐたが、みさのゐるカフエーの情景がぼうつとうかんでくると、やがて三十にならうとするみさが若い女たちのあひだにまぢつてさわいでゐる姿がみすぼらしく描きだされてくるのであつた。改札口から出てきた驛員が手に持つた鐘をガランガランとふりながら、「常盤線、××、××——××ゆき」

と調子のついた聲で怒鳴ると、いくらもゐない人影がざわざわとみだれて吸はれるやうにあつまつてきた。風來は向うの驛へ下りてからみさのゐる町までの距離を考へるともなく考へてゐるうちに、急にげつそりした氣もちになつてきた。吹きさらしの田圃みちを步いてゆく氣もちにもならないし、さうかといつて自動車を傭つ

たら一里足らずの道は尠くとも二圓はとられるだらう。それにみさの間借りをしてゐるといふ家にも何か手土産ぐらゐは用意してゆかねばならぬし、こんなことならさつき思ひきつて途中で買へばよかつたなぞとひとりで考へてゐると、まもなく汽車が動きだした。途中の××驛へ着いたのはそれから三十分ほど經つてからだつたが、降りる客はひとりもなく、ぼんやり窓にもたれてゐるところへ、正面の大通りから走つてきた一臺の自動車が驛の前へぴたりと横づけになつて、扉があくと派手なコートを着て黒い襟巻で顔を埋めた女がおりてきた。みさぢやないか、——と思つたとき、彼女は開札口を小走りに走りぬけて風來のゐる客車へ入つてきた。

「あら、——ゐたのね？」

みさは風來とならんで腰をおろし、小さい風呂敷包を膝の上へ置いて忙しさうに呼吸をした。「ハラハラしちやつたのよ、間一髪といふところだつたのね」

「どうしたのかい、——こんなところから？」

風來の瞼しい眼にみさは酒に火照つた笑顔を向けながら、

「ちやうど自動車でこの町へかへるお客さんがあつたもんだから無理に乘せてきてもらつたのよ、でもよかつた、間にあつて」

「切符は？」

「いいの、あとで、——みんな知つてるんだから」

早口に言つてから、風來の方へぐつと身體を凭せかけた。「あんた寒くない？」

「だけど、どうしたの、マユミは？」

「駄目ね、——もう、だから、せめて着物でも着せてやらうと思つて、これ、マユミのよ」

風來はみさの押しつけた風呂敷包にそつと指をさわつてみたゞけで、

「ぢやあ、お前はカフエーからかけたんだな、さつきの電話は？」

「さうよ、——うちのひとにたのんできたの、長屋の人たち、とても親切よ、でも、ほんとによかつた、あんたが來てくれて」

汽車が××驛へ着き、みさが部屋を借りてゐる職工長屋まで自動車を走らせたと

きは一時すぎだつた。マユミはもう意識がないらしく、風來が枕元に坐つて看護をしてゐた耳の遠いおばあさんとまだるつこい話をしてゐるうちに、一二度輕いしやつくりをしたと思ふと、それきりで息が絶えてしまつた。風來は小さい手を自分の手の中でしつかりにぎりしめてゐたが潮の引くやうに暖かさが消えていつた。眼を泣きはらしたみさは墜くなつたマユミの身體を抱きあげて幾度も頬ずりをしながら、何時かもう一度自分のところへ生れかへつてくれと泣きしやべりにしやべりつづけてゐたが、風來は空空しい氣もちがしてそつと顔をそむけた。みさがマユミの頬に粉白粉をつけ、唇に紅をさしてやるとつめたい死相にいきいきとした翳がうかんできた。それが風來の眼には自分の子供ではなくて何處かの店先にならんでゐる大きな人形のやうに見えた。みさはその唇を自分の乳房に押しつけ、あたりかまはず泣きつづけてゐたが、張りきつた乳房をぐつとおさへてゐるみさを見ると、風來の胸にはじめて悲しさがこみあげてきた。うしろに人の氣配がしたので慌てゝ振り向いてみると、この家の主人である鑄物工の親爺が大きな手に鼻汁をこすりあげて坐

つてゐた。ひどい霧のたてこめてゐる外の空氣は、ガラス戸の向ふ側でだんだんあかるくなつてくるやうである。

浪曼的時代一面

その木造のビルディングは日比谷公園から數寄屋橋の方へ行く電車通りの左側にある露地の曲り角にあつた。三階建であるが、實際使用に堪へるのは二階と階下だけで、三階はほとんど物置同樣の部屋になつてゐた。その二階がわれわれの事務室で、そこには小さいテーブルを四つつなぎ合せて六人の社員が一つづつの抽出（正確に言へばテーブルの半分）をあてがはれてゐるのであつた。時は大正七年、歐洲大戰がまだ眼鼻もつかずに次々とあたらしい情報をもつてこの極東の一島國をおびやかしてゐる頃である。

その頃、東京市内は戰爭の影響による好景氣で賑つてゐたが、そのせゐか、われわれの仕事もだんだんいそがしくなつてきた。

しかし、窓をあけると空が見える。空が無際限にひろがつてゐるといふことがわ

れわれの空想を唆るのであつた。曇つてゐるときには砲煙が遠くからながれてくるやうに思はれるし、晴れてゐるときには小春日の下に談笑してゐる兵卒の樂しさうな姿が見える。わけもなしに心が苛立つのも何か身に迫るものをかんずるからであらう。

何かしなければならぬ、——といふ考がわれわれを支配してゐたのである。まつたく何かしなければならぬ。しかし、何をしたらいいのか誰ひとりとしてわかるものはなかつたし、それに何一つ出來さうな仕事もなかつた。それほど何をすることも出來ない時代だつたのである。

『賣文社』といふ名前は今日においてはすでに一つの古典であるがわれわれの社長西極水は十年前に××事件によつて浚ひつくされた同志のためにこのささやかな仕事をはじめたのである。それが次第に大きくなつて事務所が彼の書齋から銀座裏の長屋に移され、それが何時の間にか今日の隆盛を示して今は京橋××××番といふ電話さへも据へつけられることになつた。かうなると、同志のためであつたことが

次第に彼のためにもなりつつあることはわかりきつたはなしである。この事務室の中ではもちろんわれわれ社員は社會主義者ではなくて賣文技手なのである。仕事は仕事、思想は思想であるといふ考へ方によつて、われわれは社會主義の勉強をする前に賣文技術を習得するやうに訓練されてゐた。それが西極水の意見でもあつたが、一方から言へば彼はかうしてやがて來るべき時機を待つてゐたといふことにもなる。仕事をやりとげるものは常に時機を待たねばならぬ。だから西極水は大石內藏之助であつた。それが若い赤穗浪士にはがまんができなかつたのである。しかし、彼は若い浪人たちの心事を理解しなかつたわけではない。彼の立場に立つて言へばぢつと時勢を達觀してゐたのである。

「どうせ高の知れたことしか出來る筈はないのだ、われわれは犬死をすべきではない。今に世界の大勢がうごいてくる。するとひとりでに動かなければゐられなくなるときが來るのだ」

さういふ西の意見に對して先づ强硬に反對したものは原口理吉だつた。

「その高の知れたことがやりたいのだ！」

原口の心の底には何時の間にか西に對する反逆心が芽をふきはじめてゐた。原口の強味は彼が毎日事務所へやつてきて社長の代理をつとめてゐるといふことにある。一口に言へば彼は若い社員の心を自分の方へひきつけることにもつとも都合のいい境遇にあつた。それ故、自分に不利な人間を片つぱしから放逐することができたのである。そこで、原口の周圍には彼の謀反に應ずるためのさまざまな心理が渦を巻いてゐたのである。

例へば、

A——彼は西を追ひ出すことに加擔する第一人者であつた。それは彼が西からあまり重要視されてゐなかつたがためばかりではない。彼にとつては運動よりも實文業の方がはるかに重要であるほど優秀な技術者であつた。だから西を追出せば實文業から入る利益を自分たちの手におさめることができるわけである。このことは實收入と彼の月給とを比較してみればすぐわかることで、仕事に應じて利益を分配することになれば彼の月給は十倍ちかくにのぼるであらう。運動よりもその方が彼には必要だつたのである。

B——彼は西の崇拜者だつた。それだけに西の用意周到さに痺れを切らしてゐたのである。（いつの場合でも同じことだが崇拜者といふものが先づ第一に痺れを切らすものなのである）

C、D、E——彼等（むろん私をふくめて）はまだ學校を出たばかりの若造だつた。だから世なれた原口の意見によれば情熱の動いてゆく方向に動いてくる。（もう一つAの意見によれば、彼等を釣るには餌はいらぬ、唯はりさへぶちこめばいいのである）

そこで、これ等の一つ一つの意見を綜合したわれわれの感情は一日ごとに高まつてきた。日本に一つしかない、——といふよりもはじめて出來た職業であつたし、それに西の信用と交際範圍が廣いだけに仕事の中絶するといふことはなかつたのである。「ボロ實業雜誌の社長の論文の代作」「大學の卒業論文の代作」この二つがも

つとも金目になる仕事だつた。

テーブルをかこんで仕事は毎日同じかたちで進行してゐる。Cは何とかいふ多額納稅議員の倅があたらしい『法學士』の學位を得るために書きあげる卒業論文をもう大半書きあげてゐた。その横では呉服屋の番頭のやうな顔をしたAが『日蓮、親鸞、法然比較評論』といふ大物に手を染めてゐるし、Dはときどき忌まいましさうに紙屑をかぢりながら捨てられた妾が二度の勤めに出て昔の旦那である高利貸に金をせびるための手紙に憂き身をやつしてゐるのである。Eは金持の不良少年が女學生を口説きおとすためのラブレターを書いてゐるし、Fはボロ實業雜誌の巻頭を飾るための『社會主義撲滅論』を一氣に書きなぐつてゐる。それから僕である。僕は炭屋のおやぢがなぢみの藝妓におくる手紙で今やつとひと汗ぬぐつたばかりのところだ。（かういふ種類の手紙が一ばん多い。——われわれはいふまでもなく賣文技手であつて、顧客の秘密をまもることが生活の鐵則であつた）

「もうとてもいかん、——おれはこんな仕事をするより人力車夫にでもなつた方がよつぽどましだと思ふよ」

Dは、おなつかしき旦那さまへ、さびしき藤代より、と書いた萬年筆のさきを感慨深さうな眼でしみじみ眺めてゐた。しかし、誰も彼も苛々してゐたことに變りはないのである。

「おれたちはまつたく鼠さ」

不良少年の手紙にすつかり實感的になつてぼうつと上氣したやうな瞳をあげたEが小さい聲で彼の横にゐた僕の耳にささやくのであつた。しかし、彼は僕の机の上にひろげてある原稿用紙の上に、「……このごろはだんだん世間の景氣もなほつてきたのでもうひと息でお前をひかせることもできるのだから」と書いた文字を見つけると、どつと笑ひだしてしまつた。

「何だい、——こいつは？』

「いや」

僕はがたりとペンをおとした。「これだから炭屋のおやぢらしくひびくちやない

か。僕は昨日應接間でこのおやぢに會つたからな」

「まるで紺屋高尾だな、いつそのこと浪花節で書いたらどうだい？」

Dは倦怠（けだる）さうに陽のかげつた窓の外に眼をうつした。

「それで何だい、君、――鼠といふのは？」

「鼠ぢやないか、おれたちは」

彼はにやりと笑つてからまた萬年筆をとりあげた。つまり彼に從へばわれわれは、だれか一人身を危險にさらすことによつて革命の縮圖を示すやうなすばらしい計畫について語り合ふのであるが、しかし、だれひとりとして進んで猫の首に鈴をゆはへつけようとするものはゐないのである。

ある日の夕方、ひと仕事終つたあとで原口が緊張した表情をして言つた。「諸君、今夜は是非相談があるんだ！」

その夜、一つのことが決議された。そして西の臥薪嘗膽のむくいは彼の背後にある赤穗浪士を右傾的な運動にみちびく結果となつてあらはれた。實行、然り、實

行。實行が大切なのである。どんな實行でも藝妓におくるラブレターの代作をしてゐるよりは、それから『社會主義撲滅論』を書いてゐるよりはましだつたのである

「だから、――」

と原口が言つた。「出來る範圍内で出來るだけのことをやるよりほかに道はないんだ、議會政策だつて何だつて」（政治運動が極度に輕蔑されてゐた時代なのである）

「贊成！」

「だから僕はかう思ふんだ、結局、實際運動の上に妥協も非妥協も、いや、もちろん積極も消極もないさ、いいかね、もしあるとすれば、それは View を異にした客觀の相違だけぢやないか！」

かうなれば西が默つてゐる筈がなかつた。そこで當然、西と分離する必要が生じてくる。これが若い連中、Bを大將とするC、D、E、F、――を納得させる大義名分だつたのである。

われわれ（といつてもCを除いて）は狐につままれたやうな氣持だつた。

その結果。

もはや猫に鈴をつける必要がなくなつた。（といふのは彼等は進んで猫の餌食にならねばならなくなつたからである）

西がゐなくなつてからの賣文業はがらあきになつた。だから、CもDもEも、もはや、ラブレターの代作をする必要はなくなつてしまつたのである。

つまり、彼等は失業したのである。もつともFだけは代作のかはりにこんどはほんたうのラブレターを切ない思ひで書きはじめたのであるが。

（これはある時代のわれわれの生活の一例であるにすぎぬ。日本の社會運動史の上にかくのごときさまよへる情熱のあつたことを今日たれが知るであらうか。「何かしなければならぬ」「何かしなければならぬ」とさけびあつたわれわれの合言葉を僕は十餘年後の今日、昔きいた流行歌のひとくさりのやうに思ひだすのである）

粋な中尉さん

まるでこれはメルヘンの中に出てくるお菓子の家みたいではないか。郊外の町はづれにある丘の下のふかい森かげに、遠くからみると古い塔のやうな、そばへよつてみるとボール紙でつくつた箱のやうな、十八世紀風の輪廓美をのこしてそびえてゐる小さい喫茶店ではあるが、しかし、こんな途方もない場所にこんな奇妙な家をつくつた人間はよつぽど奇妙なやつにちがひあるまい。誰にしたつて、まさかこんな場所に「喫茶店」があるなんて夢にも思はないであらうよ。

だが、星の降るやうな明るい夜に、蟲の音をわけながら丘の傾斜面をおりてくる人たちの足が、ふと森かげの小路にさまよひ入るとしたら、樹の間がくれに窓の青いカーテンをとほして、ふかい夜の闇の中にぼうつとうき出してゐる影繪のやうな人のうごきに思はず胸をおどらすであらう。それ故、この喫茶店のほんたうの名前

はいつの間にかわすれられて、「森の家」といふ通り名ができあがつてしまつたのも無理はあるまい。

さて、はなしは、この「森の家」のひとり娘のお美代からはじまる。今年十六になつたばかりの、斷髪をした洋裝のお美代は、いつもほがらかで無邪氣な、屈托を知らない少女なのだ。このこましやくれた、巴旦杏色の頰をもつたエンゼルは、終日レコオドのメロディにつれて、快活にしやべつたり唄つたりする。そして、おもちやのやうなテーブルのあひだを、紅茶やウヰスキーの盆を器用に運びながら、まるでひとひらの花のやうに笑ひくづれるのである。

ところで、ある夕方。

ぼく（作者）がひよつこりはひつてゆくと、お美代は客のゐないがらんとした部屋の隅のテーブルによりかかつて、顔をテーブルの平面とすれすれにしながら、レター・ペーパーの上にいつしんになつて萬年筆をうごかしてゐるのだ。

ときどき、小首をかたむけたり、ひとりでにやにやとわらつたり、さうかと思ふと、悲しさうに眉をしかめたりしてゐるところをみると、どうやら、このこまちやくれたエンゼルにもやうやく青春の幕があがつたらしい。——さう思ふと、ぼくも好奇心に胸をおののかせながら、足音を忍ばせて、うしろから近づいていつた。しかし、お美代の頭ごしにレター・ペーパーをのぞきこんだぼくは、小學校を出たばかりにしてはうますぎる文字の列を三四行よんでゆくうちに、まつたくびつくりしてしまつた。

——愛するお美代さん、

と、いふ書き出しである。

とつぜんにこのやうなはしたないたよりをさしあげることをおゆるし下さい。じつは僕、あなたがほんたうに好きなのです。これは、はじめて「森の家」に行つてあなたを見たときからです。でも、僕はよくふとつてゐてこんなに大きいくせに、とても恥かしがりやなのです。——

ぼくは、ここまでよんでくるとまつたく狼狽してしまつた。

「おい、おい、――」ぼくがうしろから叫んだので、お美代はびつくりしたやうにうしろをふりむいたが、すぐに、何時もの屈托のない笑聲になつて、

「あら、寒山先生なの、ひとがわるいわね。ひとの手紙をぬすみよみするひとなんか大きらひよ」

と、手を器用にふりながら言つた。

「手紙だつて、――だけど、一體、誰に出す手紙なんだい？」

「ラヴ・レターよ」と、お美代は、ぢろぢろと僕の顔を見あげて、

「あたしのところへ來るラヴ・レターよ」

「君のところへ――」

「さうよ」

「だけど、君が書いてゐるぢやないか？」

「さうよ」と、お美代は大きい眼をくるくるとうごかしながら、

「あたし、どなたの御厄介にもならないつもりなのよ、だから、何だつてみんな自分でやるの、――だつて、さうぢやない？　よそのひとの書いた手紙なんか、あたしの思つてゐるやうなことはこれぽつちも書いてないんだもの、自分で書く方がどんなに樂しいか知れやしないわ」

「なるほど」と、ぼくも思はず合槌をうつてしまつた。

お美代は、うつとりとするやうな顔をあげて、

「ねえ、そこにゐて、あたしのよむのを聽いてゐて頂戴。そして、いけないところがあつたら直してね」

ぼくがぼかんとしてゐるあひだに彼女はもう、何時もの唄ふやうな調子で自分の書いたラヴ・レターをよみはじめた。

「――愛するお美代さん、とつせんにこのやうなはしたない……」

「そこはもうよんだよ、ぼくはとても恥かしがりやなのです、といふところからでいゝよ」

「え、――そんなところまでよんだの、ぢやあ、つづきをよむわ、ここのところを

よくきいてゐてね、——今まで何ごともうちあけられずにひとり惱んでゐたのですが、だが、もうぢつとしてこらへることが苦しくなりました。ぼくは君のことを思ふだけでセンチになつて、——」

「そこはまづいね、センチになつてといふのはへんだよ、悲しくなつてとか何とか直した方がいいね」

「ぢやあ、さうするわ、悲しくなつて、——でも、やつぱりセンチの方がいいと思ふわ、そのあとへすぐ『苦しくなつて』といふ字が來るんだもの、『なつて』が重なつちやおかしいぢやないの、さあ、あとをよむわよ、ぼくの切ない心のうちをくんで、これからは仲のよい友だちになつて下さい、お願ひです」

「だけど、一體、手紙を書いてゐるのは誰なんだい？」

「海軍中尉の星野さんよ」

「海軍中尉だつて——？」

ぼくはまつたくどぎまぎしてしまつた。それにしても、一體この小娘の頭の中には何がつまつてゐるんだらう。しかし、彼女はそんなことには無頓着で、キユーピーのやうな首をふりながら、

「だつてね、あのひとが中尉さんの制服を着てくるととても素敵よ。うちのおねえさんだつて、あのひとと話をするときには苦しさうに肩で呼吸をしてゐるわ、おねえさんが何時も言ふのよ、軍人も中尉までが粋だつて——」

「ぢやあ、君は、その星野中尉に戀してゐるんぢやなくて、軍服に戀してゐるんだね」

「でも、やつぱり同じことぢやないの。あたし、中尉でない星野さんのことなんか一ぺんだつて考へたことはないのよ」

「でも、中尉がそんな手紙は書かないせ」

「ぢやあ、何と書くの——？」

「そいつはわからないね。だが、中尉だつたら、きつと、もつと勇ましいことを書くと思ふな」

「ぢやあ、すつかり變へるわ、おい美代公、おれはお前が好きなんだぜ、——さうね、この方があのひとらしいわ」

それから一ト月の後。雨あがりの午後であつたが、ぼくが久しぶりでひよつこり入つてゆくと、お美代が何時になくしよんぼりして、窓際のテーブルで、トラムプのペーシエンスをやつてゐた。

「お早う」と、ぼくが言ふと、

「——あゝ、厭になつちまふわ、あたし、星野さんが來たと思つてゐたのよ」

「おや、おや」と、ぼくも頭をかきながら、彼女のテーブルの前に腰をおろして、

「中尉さんは來ないのかい？」

「えゝ、——いま占つてゐたのよ、とても來さうにもないわ、ねえ、寒山先生、あのひとのラヴ・レターを書いてくれない？」

「よし、書いてやるよ」

「ほんとに、——ぢやあ、今、すぐペンとペーパーを持つて來るわ、それから注文があるのよ。あたし、あのひとからへリオトロープの香水をもらひたいのよ、だから、こんど持つてきてくれるやうに書いてね」

「よし、來た——」と、ぼくはすぐにレター・ペーパーの上に萬年筆を走らせた。

「さあ、いいかい、——書くそばからよんできかせるよ。えゝと、もうすつかり戀が成就したことにするよ。よむぜ、——お美代よ、一昨日も昨日も今日も、お前のことで頭が一ぱいだ、ときどき自分の唇を舐めまはしながら、お前との接吻の樂しさを偲んでゐるよ」

「うそよ、うそよ、——あたし、接吻なんかまだ、一ぺんだつてしたことはないのよ」

「だからさ、したことにするんだよ。いいかい、お前の小さい肩を抱きすくめるときの感觸のこゝろよさを思ひだすと、頭がぼうとなつて血壓まで高くなつてくるやうな氣がする。人と話をするときだつてわけのわからんことをしやべつてしまふ

し、――」

「そんなことはどうでもいいのよ、ヘリオトローブはどうしたの？」

「だからさ、そんなにせくもんぢやない。ええと、さて、先日お前と會つたとき、お前はおれの靴下の上に香水をこぼしたね、あれで友だちにひやかされて、おれは始めてあれがヘリオトローブだといふことを知つたんだが、あのにほひはとても強烈だね、『花言葉』をさがしてみると『陶酔なんぢを愛す』とあつたよ――」

「あら、すてきね、やつぱり中尉さんて、ずゐぶん粋なものね」

「さあ、餘計なことを言はないで。――あの晩、おれはあまり強くお前を抱きしめたので、後になつて肩が痛くつて困つてやしないかと思つて心配してゐるよ。こんど行くときにはヘリオトローブの香水を一ダース持つていつてあげるよ」

「一ダースだつて、――あたし、一つでたくさんよ」

「そこが軍人なんだから、勇ましいところを見せなくつちや」

「だけど、もう少し複雑な戀愛事件か何かつくつてくれない？」

「無理だね、そいつは――」

「かうしたらどうなの。あのひと、うちのおねえさんが大好きだつたとするのよ、だから、あたしは失戀なの。ところがおねえさんの方ではほかに好きなひとがあるといふことにするの」

「その男は何ものだい？」

「それであたしも困るのよ、ねえ、だから、假りに寒山先生、そのひとになつて下さらない？」

「ぼくが、――とんだいろをとこになるんだな。まあいいさ、ぢやあ、書くよ。お美代よ、ぼくはお前がこんなに可愛いいやつだとは夢にも思はなかつたよ、それにつけてもお前のねえさんは何といふ薄情者だ、聞けばこのごろは、あのうすぎたない青ぶくれのよぼよぼの三文小説家と仲がいいさうだが、ずゐぶん變つてゐるね、ぼくあんなやつは見つけ次第なぐつてやるよ」

「困るわ、そんなことしちやあ」

「だつて、戀のうらみだから仕方がないさ」
「でも氣の毒ぢやない、おねえさんが、——あなたはいいけれど、おねえさんをなぐるなんて」
「だからさ、手紙の文面でなぐられるのはぼくだけだよ、いいかい、——さて、何と言つたかな、お美代よ、おれの心の苦しさはお前にもわかるだらう？」
「わかるわ」
「いちいちへんぢしなくたつていいよ、えゝと、——さうだ、ヘリオトロープの香水を持つていつてあげるが、おねえさんにやつてはいけないよ」
「何故？」
「あんな、ひどいやつに誰が贈りものなんかするかい」
「でも、おねえさんがわるいんぢやないのよ、そのひよろひよろの、うすぎたない小説家がいけないのよ」
「おい馬鹿にするなよ、——おれのことをひよろひよろだなんて」

「だつて、御自分でさうおつしやるんだもの、でも、おねえさんはずゐぶんお氣の毒なのね、おねえさんだつて、どんなに中尉の軍服が好きだつたか知れないのよ、——あんな、やくざな貧乏な小説家が好きになるなんて、心の迷ひだわね」
「おい、おい、妙なことを言ふなよ、まるで話がこんがらがつてしまつたぢやないか」
「その方がいいのよ、戀愛に波瀾がなければおもしろくないわ、あゝ、それはさうとあのひとほんとに今日來るかしら——？」
さう言つて、お美代は、明るい午後の陽ざしの中に樹木の縞がうすい影をなげてゐる窓の方を見あげて立ちあがると、不意に頓狂な聲でさけんだ。
「あら、いらつしやい！」
それから僕の方を向いて、——
「あの方よ、星野さんて」
ぼくもその拍子に立ちあがつて、窓の方を見たが、しかし、落葉を埋めた樹立の

雁

深い道にも、それから街道へつゞく丘の傾斜面にも、士官の姿はおろか、人らしい影は見えなかつた。

「誰もゐないぢやないか？」

「いいのよ、——あたしにはあのひとの靴の音が聞えるのよ、今からでもお化粧が間に合ふかしら、あゝ胸が顫へてゐるのよ、寒山先生、わかる？」

彼女はひとりではしやぎながら奥へ入つていつてしまつた。

1

去年の秋、北支蒙疆旅行の途上、私は偶然にも舊友の南原に會つた。場所は北京飯店の二階で、——時が時であつただけに私たちはしみじみ語り合ふといふわけにはゆかなかつたが、そのとき私が明日、蒙疆に出發する豫定になつてゐるといふ話をすると、

「ぢやあ、君」

と、彼が急に感慨ぶかさうな聲で言つた。

「湖心亭といふ日本人の經營してゐる料理屋があるんだがね、時間があつたら是非そこで、千草といふ藝妓に會つてみたまへ、おそらくまだそこにゐる筈だから」

「その女に何か變つたところでもあるのかね？」

女の身の上ばなしなぞに興味をかんじてゐられるやうな時でもなかつた。私があつさり彼の言葉をうけ流すやうにして視線を外らすと、彼は、何か思ひつめたときにやる昔ながらの癖で、眼をチカチカとつよくしばたたき追ひかけるやうな聲で心持ち上體を前に伸ばした。「――いやよ。大陸に流れこんでゐる女にはみんなそれ相當の來歷があるが、しかし、あんなやつは珍らしい、たしかに一つの境地に達してゐる女だ、情痴の世界もあそこまでゆくと冗談事ぢやなくなつてくるね」

氣がついたときにはもう彼は女の身の上ばなしをはじめてゐたのである。ほかのことを考へながら、「うん」「うん」と、合槌をうつてゐるうちに、彼の言葉がだんだん私の頭に沁みついてくる。長い習慣から他人の話を聞いたやうな顏をして實は何も聞かないでゐられるやうな癖のついてゐる私ではあつたが、途中までくるともう話の中にひき入れられてしまつた。それまでにおよそ半分ちかくはかかつたであらう、――私の幻想の中にその女の姿がはつきりうかびあがつたのは、彼女が下關で、ある有名な魚問屋の主人に落籍されてからのことである。心覺えのままに南原の話をそのまま書きとめて置くことにしよう。

千草は落籍されるとすぐ一軒の妾宅に圍はれることになつた。二十二で、下關切つての寶れつ妓であつた彼女はそのときすでに清元の名とりになつてゐた。

「それが大へんな引き祝ひで、魚問屋の親爺の惚れ方といふものは尋常一樣ぢやなかつたらしい、――それに妾宅の費用といふものが毎月千圓だといふんだから下關あたりぢや開闢以來といふわけさ、ところが、女の方から言へば無理矢理にさらつてゆかれたといふかたちで、大事にされればされるほど男の顏を見るのも厭になる、それで、ほかに男をつくつて逃げだしたことが何べんあるか知れないんだよ、すると、そのたびごとに男が追つかけてきて宥めたり賺したり手のかぎりをつくして引き戻してしまふ。男の親切と好意は身に沁みるわけだが嫌ひなものはどうしたつて嫌ひなんだ」

「男はもう老人なんだね？」

「ところがさうでもないらしい、年齢は聞きそびれたが、女の話によると相當の人物で何處に批難のうちどころもないといふんだ、どうしてこの人を好きになれないのかと煩悶しつづけたんださうだが、いくら努力してみても駄目なんだね」

「ほかに好きな男でもあつたのかい？」

「それが無いんだよ、——いつもちよつと關り合ひのある對手が見つかるとそいつを足がかりにして旦那から逃げだすんだ、それをまた旦那の方ではちやんと心得てゐて、もうそろそろ金がなくなるといふ頃になるときつと誰かを迎へによこす、厭味一つついふわけぢやなし、何時でも同じ態度で迎へてくれるといふんだから大したもんぢやないか、どうやら遊蕩の悟境に通達した男らしいね」

南原の話にはだんだん精彩が加はつてくる。——その女が到頭一人の男に惚れてしまつたのだ。それも以前のやうな昔馴染の男ではない。對手は浪花節の流しで、裏長屋には女房も子供も待つてゐるやうなその日稼ぎの出來損ひである。

「そいつがもう四十をすぎて、丈は低いし頭の毛はうすくなつてゐる。どこに取柄があるといふ男でもないのにふらふらとまゐつてしまつたんだよ」

「浪花節にまゐつたんぢやないかね、國定忠次か何かの？」

「さうでもないらしい。——もし浪花節に惚れたんなら、一流の語り手がいくらでもゐるんだからね、金はあるし浮氣だつて仕放題ぢやないか」

2

いよいよ惚れたとなると、持ち前の性分でもう居ても立つてもゐられなかつた。もちろん女の方から口説き落して五百圓あまりの金をふところにしたまま二人で行方をくらましてしまつたのである。金のあるあひだは熊本、別府、長崎と遊び歩いてくらしてゐたが、結局それも半月とはつづかなかつた。男の方は半ば金が目當の仕事でもあつたし、いざとなつたら遊廊か銘酒屋へでも賣りとばさうと思つてゐたらしい。しかし、さすがに落魄れても名妓の成れの果であつた。男の情なさよりも

下賤な根性がどうにもやりきれないものになつてきたのである。

「到頭木賃宿を泊り歩くやうな身の上になつてしまつたんだが、厭だと思ふともうどうにも我慢がならぬ。別ればなしは何べん持ちあがつたか知れないんだが、さうなると男の方が縋りついてはなれなくなる。考へあぐんだ末に彼女は頭をくりくり坊主に剃つて四國遍路に出かける決心をしたんだよ」

「罪ほろぼしのためにか――？」

「さうぢやない、男と別れるためさ。それほど男がまとひついてはなれないんだよ、止むなくその決心を男に話すとやつと納得したんださうだがね」

「それで、ほんとに坊主になつたのかい？」

「もちろんさ、――それが門司の宿屋なんださうだが、やつと身仕度をして、いよいよ明日四國へ立つといふときほどうれしかつたことはなかつたと言つてゐたよ」

「ぢやあ、ほんとに出かけたんだな？」

「出かけるには出かけたんだが、君、それからが大へんさ、――草鞋をはいて木賃

宿を出ようとするときになつて男がとびこんできたんだ」

「何だつて、また？」

「おどろくぢやないか、そいつが君、同じやうにくりくり坊主になつて遍路の身支度をしてやつてきたんだよ。あゝ萬事休す、さうなつてみれば斷るわけにもゆかないし、もう身ぶるひするほど厭な男と手に手をとつて四國遍路にのぼつたわけさ」

「なるほどね」

私ははじめて心からうなづいた。「その氣持はよくわかるよ、――彼女が女だからぢやない、男だつたらもつと離れにくいところへ追ひ込まれてしまつたらう、それでどうしたのかい、四國からかへつて？」

「生きた心地もなかつたさうだ、門司へ着いたのが夕方で、懐中には一文の金もない。たつた一つ昔の生活のかたみに殘つてゐた金の指環を十何圓で賣りとばしてやつと宿屋に落ちついたものの、これからどうしようといふ當はないんだよ。さうな

ると男も女の境涯が哀れになつてきたらしいね。もつとも、しぼるだけしぼつても
うこいつは賣り物にはならぬと見切りをつけたのかも知れないが、そのとき女の方
から、もう一度旦那の前に手をついて五百圓の金をつくつてくれと賴んだら何とか
してくれるだらう、そしたらその金はそつくりお前にやると言つたもんだからやつ
と本氣で別れる氣持になつたんだ」

男も女も起居を共にしてゐるあひだに對手の性格だけはしつかり呑みこんでゐた
らしい模樣である。それで、男を門司の宿屋へ殘し、自分だけ下關行の連絡船に乘
つたときの女は、もし出來たら自殺したであらうが、しかしそんな勇氣もないほど
疲れきつてゐた。船を待つてゐるあひだ立つてゐるのがやうやくのことで、すぐう
しろの鐵板に『ペンキ塗りたて』と大きく書いてある文字があざやかに瞳に映つて
ゐながら身體は杖によりかかつたままぐつたりとそつちへ倒れかかつてゆく、——
南原は女の口吻を眞似て苦しさうな顏をしてみせた。

その夜、下關へ着くと彼女は幽鬼のやうな足どりで、うす闇の中を昔くらしてゐ
た藝妓街の方へ步いていつた。少女時代の數年間をすごした養母の家がすぐ眼の前
にある。彼女がそこを出てからお披露目をした若い妓が座敷着を着て俥に乘らうと
するところだつた。その俥を見送つてから思ひきつて格子戶をあけると長火鉢の前
に坐つてゐた養母がびくつとしたやうに顏をあげた。

「やつと彼女だといふことがわかつたときには養母もしばらく唸つたまま物を言は
なかつたさうだ。——ところが、わかつてみるとたちまち丁寧にしてくれる、まア
二階へあがつてひと休みしろといふので言葉どほりに二階で待つてゐると、早速養
母が知らせたものらしい、旦那の魚問屋の主人が二人曳きの俥で駈けつけてきたさ
うだ。このときほど男のありがたさを心の髓からかんじたことはないと彼女も言つ
てゐるよ。旦那はどんな姿にならうと、たゞ彼女がかへつてきてくれさへすればい

いんだからね」
「大したもんだな」
「實に何とも、——藝妓の旦那には、もつたいないくらゐの人物さ。何も文句は言はぬ、このままかへつてくれといふんだが、後悔すればするほどその言葉に甘えるわけにはゆかぬ、——そこで萬事を打ちあけてから、私はどんなにあなたに親切にされてもあなたが好きになれないんです、どうかあきらめて下さい、と言ふと、しばらく考へてゐたさうだがね、そいつは仕方がねえ、ぢやあ別れてやらうといふことになつて五百圓の金だけを手切金にして渡してくれたといふんだよ」
「ますますもつて大人物だね」
「その金の中から二百圓を門司に待つてゐる浪花節の流しに送つてやり、あとの三百圓を懐中にしてふらりと別府へ行つたんだ、しばらく靜養して身體をやすめるつもりだつたらしいが、そこでまた大へんなことが起つてしまつたんだ」
「何かね？」

「——そこで隣りの部屋にゐた若い男と知合ひになつて、いろいろ身の上を聽いて見ると、そいつが朝鮮の官廳に勤めてゐた男なんださうだが、官金を費消してゐるんでどうにかしなければ刑事上の問題になるといふんだ。——傳法肌の女だからうつかり同情してしまつたのが運の盡きだね、金額をきいてみると僅かに百五十圓だといふんだよ。そいつをぽんとなげ出してやつて、そのまま別れてしまへばよかつたのが、やつぱり一種の病的な浮氣者なんだね、愚圖愚圖してゐるうちにその男といつしよになつて朝鮮へ渡ることになつてしまつたんだよ」

4

そのあたりから聽き手である私の興味は次第にうすれてきた。彼女は京城で小さいおでん屋をはじめたのである。それがすばらしく當つて貯金はみるみるうちにふえてくる。一年足らずのうちに生活の安定を得られるやうになつたが、さて、さうなるとたちまち持ち前の放浪性が頭を擡げはじめた。もとより好きでいつしよにな

つたといふ男ではなく、偶然の作用でかうなつただけのことである。

「そこで、またそこをとび出すやうなことになつてしまふんだが、長くなるからざつとそのへんにして置かう、まだ年齢は三十を少し出たばかりだし、いよいよ一人になれば昔の生活にかへるよりほかに仕方がないだらう。——僕のはじめて會つたのは上海なんだが、それから三年經つて、包頭へ出かけてみると、それが昔のとほりの千草といふ名前で藝妓に出てゐるんだよ」

「會つたのかい？」

「うん、それが妙なんだ。——あそこの特務機關長が個人的に一夕僕を招待してくれたんだ。湖心亭といふ名前だけはずゐぶん氣が利いてゐるが、實は蒙古人の住宅をそのままつくり變へてゐるやうな家さ、土間にアンペラを敷いて、その上で一杯やらうといふやうな始末なんだが、はじめてこの土地へ藝妓が三人着いたばかりのところだといふんで湖心亭は大へんな繁昌なんだよ。客は機關長とほかに日本人が一人、僕を加へて三人なんだが、となりの部屋でいい氣持にさわいでゐる連中があ

る。——僕たちはしんみりやつてゐたので、うつかりすると隣りの話聲に氣をとられてしまふ。話の樣子から察すると四五人の客は若い軍屬らしい。そのうちに勘定といふことになると、みんなで金を出しあつてゐる樣子なんだが、財布の底をはたいてもまだ足りないらしい。どうにも悄氣かへつてゐる連中の顏が眼に見えるやうなんだ。そのうちにしいんとなつてしまつたので女中を呼んできいてみると、そこにゐた藝妓が、三十何圓といふ勘定をそつくり自分の懷中から出して、自分たちはみなさんを慰めに來てゐるんだからこんなお金をいたゞいちや罰があたると言つて客の出した金には手をふれさせないんだよ。そんなかんじが客の方にもしつくりと溶けこんだらしい。感激しきつてかへつていつたさうだが、こつちも相當に醉つてゐるし、ちやあ、その女を聘ばうといふことになつて、入つてきたやつを見るとそれが君、千草なんだよ」

南原はさう言つてから時計を見て慌てて立ちあがつた。「ああ、もう六時になつたな、今夜は仲間のあひだで重要な相談をすることになつてゐるからこれで失敬し

よう。話はちがふが、僕はこの頃歌をつくつてゐるんだよ」

ハ、ハ、ハ、ハ、——と、自嘲的な微笑をうかべ、らふそくの灯かげはゆれて濕き茶にアジアの明日を說ける人かも、——と、低い聲で自作の歌を朗詠してから、

「ぢやあ、さよなら、——今夜はもう會へないかも知れないから、こんどかへつたときにゆつくり會はうぢやないか」

そのまま扉をあけて出ていつたのである。私は次の日の早朝、蒙疆地帶に向つて出發した。包頭に着いたのはそれから四日目であつたが、秋もすでに半ばをすぎて沙漠は砲煙のやうな砂風につつまれ、遠くに包頭の城壁がうすくかすれて見えた。その夜、私たちの泊つたのは包頭旅館といふ日本人經營の宿屋で、部屋がないので驛から同じバスで着いた、あまり人相のよくない男と泊り合すことになつた。年齡は四十前後であらうか、相貌は猿のやうで、——見るからに內地を喰ひつめてきたといふかんじである。大陸へ渡つてからさういふ種類の男には馴れついてゐるので私もそれほどおどろきはしなかつたが、夕食を共にしたり、いつしよに風呂へ入つたりしてゐるうちに何時の間にか親しく口をきくやうになつてしまつた。名刺には演藝師、岩井殘月と刷つてある。何をおやりになるんですかと言ふと、

「浪花節が專門なんですが」

といつてから、急に憂欝さうな顏をして、

「——實はこんなところでお目にかかつていきなり申上げるのもぶしつけな話ですが、もしおひまがあつたら私の昔ばなしを聽いて下さいませんか？」

彼にも私が小說家であるといふことがわかつたらしい。身の上ばなしに食傷してゐる私はいささか辟易したかたちで、

「ぢやあ、こつちへは軍隊の慰問か何かで」

「ええ」

彼は急にあかるい聲で、しきりに貧乏ゆすりをしながら、

「名目だけはさういふことにしていたゞいてあるんですが、實は昔の女房に會ひに來たんですよ」

「奥さんが、こつちにゐらつしやるんですか？」
「それが、里子にやつてある娘の養家先でやつと聞きだしたもんですから、――いい年齢をしてまつたく恥かしい話ですよ」
「こつちで何をしてゐらつしやるんです？」
「どうせ淫賣か何かやつて暮してゐるんでせう、――」
彼の眼があたらしい昂奮に輝きだした。私は北京で南原から聽いた女の話をおもひ出し、これが彼女と四國遍路を共にした男であつたのかと、われともなくうすら寒さを覺えながら、
「いろいろややこしい御關係なんですね」
「いやもう何とも、――結局愚痴を聽いていたゞくことになるんですが、私も以前には無心亭明月の門下で、師匠のあとをつぐのはあの男だと言はれたときもあるんですよ、それがあんた、下關で」
「ああ、やつぱり」

言ひかけて、私はわざとらしく顔をしかめて見せた。しかし、岩井殘月はそんなことには一向に無頓着で、
「女に見染められたのが運の盡きですよ、――女は着のみ着のままで園はれてゐる家から逃げ出してくる、私は到頭一座とわかれて九州くんだりまで浪花節の門づけをして流れてゆくやうな身の上になつてしまつたんです。おまけに女は姙娠する、生れた子供の後始末もしなけりやならぬといふわけで大へんな苦勞をしましたよ。ところが二人で朝鮮までいつたところが、女は小料理屋の女中になり、私は同じやうに盛り場を唸つてくらしてゐるうちに、そこで出來たほかの男と駈落ちをしてしまつたんです、わが身の因果とは言ひながら今となつても女の仕打だけはあきらめきれません、――しかし、どんなに行方をくらましてゐる女でも自分の腹を痛めた子供だけは可愛いらしいですね、養家先へ手紙をよこしたのがあいつの運のつきですよ」
私は默つてうなづいた。南原の話ではすつかり惡者あつかひにされてゐる浪花節

引退前

語りの言葉を聽いてゐるうちに、私は眼に見えない運命の惡意を感じないではゐられなくなつてきた。次の朝、私は彼の寢てゐるうちに旅裝を整へて特務機關を訪れ機關長の好意で一人の通譯をつれ、黃河づたひに一里ほど先にある蒙古人の部落へ出かけていつた。秋晴れの空の下に黃河は無氣味な色を湛へて濁つてゐる。そのとき列をつくつた雁が消えるやうに空をすべつていつた。足元には秋の七草が咲き亂れてゐる。大氣は膚を刺すやうに冷たかつた。

階段をみしみし音をたてて上つてくる足音を聞いたときには、困つたことになつたぞ、と思つたが直ぐに萱ノ波は寝返りをうつて空いびきをかきはじめた。がたがたと大きな音がして襖があくと、銀ノ森は闇の中をすかすやうにして前かゞみになつた。

「關取、——寝てるのかい」

彼は無雑作に蒲團をまくり上げ、萱ノ波の肩をぐいぐいと揺すぶつた。「友光もゐるし、花ノ浦もゐるんだ、みんなお前の來るのを待つてるんぢやないか、ほんのちよつとでいゝから附合つてくれよ」

何時もの手だなと思つたが、眼の前でかう言はれてみると寝たふりをしてゐるわけにもゆかなかつた。萱ノ波は「え?」——と言ひながら蒲團の上へ起き上つた。

「頭が痛いんだよ、さつき活動を觀て歸つてくると急に熱が出ちやつてねえ」

苦笑(にがわら)ひをうかべながらおそるおそる銀ノ森の顏を見あげたのである。「ほんとに濟まないが今夜だけは勘辨してくれよ、それに今夜はもう寢入つちやつたんだから」

「だから、ほんのちよつとだつて言つてるんだよ、——みんな待つてるんだから」

銀ノ森は否應なしに片手を引ずるやうにして部屋の外へ連れ出してしまつた。階段を下りて廊下を左に曲ると、細長い庭を隔てた離室がある。二三人藝妓が入つてゐるらしい。十月もやがて末にちかい、いやにひやりとする晩だつた。友光は片膝をくづすやうにして床柱にもたれかゝり、花ノ浦は双肌ぬぎになつて顏をしかめながら何かしきりに唄つてゐる。杯盤狼藉といふほどではないが部屋の中の空氣は相當亂れてゐるらしい。藝妓が立つたり坐つたりしてゐる姿が廊下の硝子戸越しには

つきり見えたのである。萱ノ波が入つてゆくと、床柱にもたれてゐた友光がむくくと起上つた。

「まあ、いゝよ」

と、銀ノ森は親しさうな聲で呼びかけ、それから直ぐに盃をとつて萱ノ波の胸先きへつきつけた。

「駄目だよ、おれは、ほんとに飮めないんだから」

十年以上も同じ部屋にゐて彼の酒を飮めないことを百も承知の銀ノ森に、かういふ態度を見せつけられると、素直に應じきれない氣持になつてきたのである。

「ほんとに駄目だよ、それに今夜は少し熱があるんで」

一度受取つた盃をそつと傾臺の上に置くのをヂロリと見た銀ノ森は急にいきり立つたやうに肩を動かした。「相模山とならば飮んでも、おれとは飮めないと言ふのかい」

「相模山?」

萱ノ波はきよとんとして銀ノ森の顔を見たが、ひよいと視線をそらした拍子に、横にゐた藝妓のしなをつくつた微笑にふれると思ひかへしたやうに、にやにやと笑ひ出した。「へんなことを言はないでくれよ。何か勘ちがひをしてゐるんぢやないか、おれは今夜、櫻山一緒に活動を觀てそのまゝ何處へも寄らないで歸つたんだよ」

「いや、——今夜のことを言つてるんぢやねえ、だいたい、お前はこの頃、何かにつけて相模山にべこべこしてゐるぢやないか」

「それは違ふよ、おれは相模山を横綱だからそのつもりで敬意を表してゐるだけのことぢやないか、べこべこするなんて、そんなことを言ふお前がどうかしてゐるぜ」

「なに？」

言つたと思ふと銀ノ森の左手はもう卓子（テーブル）の上の、やつと三分一ほどあけたばかりの麥酒罎を握りしめてゐた。

「萱ノ波、——貴樣は誰のお蔭で東京へ歸ることが出來たと思ふんだ？　少し調子が好いと思つていゝ氣になつてゐやがる」

「おい、どうかしてるぞ」

「何つ？」

言つたのと麥酒罎を振上げたのとほとんど同時だつた。咄嗟の間に身を躱す暇もなかつたのである。一瞬間、意識がなくなつて昏倒しさうになるのをやつと怺へて眼を開くと、友光がまア、まアと言ひながら申譯のやうにいきり立つてゐる銀ノ森の兩腕を押へてゐた。花ノ浦は醉つてゐるのか、それともわざとさういふ素振りをしてゐるのか、きよろりとした顏をして、この場の樣子を眺めてゐる。冷いものが眼にちかちかと沁みるので手をあてゝ見ると、べつとりとした血であつた。萱ノ波はもう何を言つてゐるのか自分でもよくわからなかつた。階段のとつつきの部屋に寢てゐた取的の萱嵐が彼の身體を抱へるやうにして階段を上つていつたことだけは覺えてゐるが、それきりで意識がとぎれてしまつたのである。氣がついてみると、

頭から頤にかけてぐるぐる巻きに繃帯がしてあるし、額の上には天井から吊した氷嚢がのせてある。枕もとに座つてゐた萱嵐が、

「親方、眼が覺めたら藥をお服みになつてください」

と低い聲で言つた。醫者がやつて來て手當をして歸つたのは三時間ほど前だつた。あたりはひつそりとして、もうそろそろ夜明けにちかい。

「それで、銀ノ森はどうした？」

「さつきまでぶつぶつ言つてましたがね、——やつと友光關になだめられて自動車で何處かへ出かけてゆきましたよ」

萱嵐の恨めしさうな聲を聽くと、萱ノ波は急に全身沸きかへるやうな怒りを覺えた。酒癖の惡い銀ノ森がそのまゝ醉ひつぶれて寢てしまつたといふのならば、まだしも何とか心のまぎらしやうがあつたかも知れぬ。萱ノ波の眼にはいかにも勝誇つたやうに意氣揚々と肩をいからせて玄關口を出てゆく銀ノ森の姿がぼうつとちらついてきたのである。もう我慢がならぬと彼は思つた。酒の上の彈みではない、あいつは初めから計畫的におれをやつつけようと思つて準備をしてゐたんだ。殴つたのが銀ノ森で、殴られたのがおれだといふことは、あの時に居合せた友光の眼にも花ノ浦の眼にもハツキリ映つてゐる筈だ。——よし、もう我慢がならぬ。誰が何と言はうともおれは後へは引かないぞ。萱ノ波はぢつと唇を噛みしめたまゝ寢がへりを打つた。博多水茶屋の旗亭、室崎の一室である。新秋のうすら寒さが肌に沁みるやうな朝であつた。瀬戸ヶ島部屋の一行は博多を打ちあげてから、四國を巡業して十一月のはじめにひとまづ東京へかへる手筈になつてゐた。

2

そのときの情景がぼうつと彼の頭にうかんでくる。——博多からすぐに東京へかへつて自宅で靜養してゐた彼は一行がかへつてくるのを待つて堂々と力士會の輿論に訴へるつもりでゐた。それがまつたく當がはづれてしまつたのである。博多を立つとき、親方の如月は、「とにかく東京へかへるまで待て、何も今更黑白を明かに

せにやならんといふことでもないし、理非は誰の眼にもわかつとる、萬事はおれが胸におさめて銀ノ森の處分は大親方とも相談の上ハツキリ決めるから」と言つていきり立つ彼を宥めた。巡業先で事を荒立てたくないといふ氣もちがわからぬ萱ノ波ではない。わかりすぎてゐるからこそ涙を呑んで東京へかへつて來たのではないか。博多にゐた頃の形勢から言へば瀬戸ヶ島部屋所屬力士の意見はことごとく銀ノ森の理不盡を認めてゐた。横綱相模山の態度には幾分煮えきらないものがあつたが、あの男が決斷に乏しいのは何も今にはじまつたことではない。大學出の三笠山をはじめとして、親方關係から言へば當然銀ノ森に味方をする筈の瀬戸泉まで、もし銀ノ森の處分を協會が決めなければ力士會で決めるといきまいてゐたほどである。銀ノ森もそのときは大勢の抗しがたきことを見究めてゐたらしい。彼の親友である中老株の若ノ濱がわざわざ萱ノ波を訪ね、銀ノ森も後悔してゐる、何とか穩便にとりはからつてもらへまいか、と涙を入れてきたのもそれがためであらう。萱ノ波はその申し出をあつさりはねつけた。「何しろ、もうおれ一人でどうかうといふことのできる問題ぢやなくなつてゐるからね、——おれの進退は如月親方と力士會の意見に任せてあるんだからそのつもりでゐてくれよ」

物わかりがよくて、その上俵振りと同じやうに悠揚とした性格のために力士會に重きをなしてゐる若ノ濱は、何とか考へ直して勘辨してやつてくれよ、銀ノ森だつてほかに魂膽があるわけぢやない、酒癖が募つてついあんな結果になつたんだから、——と、苦しさうな言ひ譯をしてかへつていつた。萱ノ波は一行が東京へかつてくるとすぐにも銀ノ森の處分問題が討議されることを信じてゐたのだ。それが、僅か一ト月經たぬうちにこんな結果にならうとは夢にも想像しなかつたのである。

腹の底をうち割つて言へば、萱ノ波も銀ノ森の出やう一つによつては四角張つた理窟をぬきにして素直に和解してもいいと思つてゐた。何時までもこんなことにこだはつてゐるのは男らしくもないし、それに第一對手が生れつきやくざな氣質を多量に持つてゐる銀ノ森であつてみれば後の祟りが恐ろしくないこともない。しかし、一行が部屋へかへつてからの樣子では所屬力士の同情は萱ノ波よりも何時の間

にか銀ノ森の方にあつまつてゐる模様である。今日、萱嵐が聞いてきた話では是非の裁きが投票によつて決せられることになつたといふ——。

「親方！」

如月親方の前に坐つた彼の聲はもうおさへきれぬ怒りのためにかすれてゐた。「例の博多の一件ですが大親方に話して下さいましたでせうか？」

脳天の禿げあがつた如月親方は人の善さうな顔にかすかな微笑をうかべた。「そいつはお前、大親方にまで持つてゆく話ぢやあるめえ、おれが萬事心得てゐるから安心しろよ」

「ですが、今日部屋の樣子を聞くと投票で決めるといふことになつたさうぢやありませんか、——今度のことは親方も御存じのとほり、どつちがいいかなんぞといふ問題ぢやないでせう、私が銀ノ森を殴り返したとでもいふんなら兎も角、私は唯、默つてぢつとしてゐたゞけなんですからねゝ、その場には友光も花ノ浦もゐたんですから何も今更そんな」

「おい」

如月親方の顔色がみるみるうちに變つてきた。「そりやあ殴つたのは銀ノ森にちがひねえが、銀ノ森がどんなに亂暴なやつだつて理由なしに殴ることはあるめえ」

「そんな、親方、——今になつて」

「いや、わしは部屋の者がどんな意見を持つてゐるか知らねえよ、——投票で決めようといふんなら投票させたらいいぢやねえか、投票だらうと何だらうとお前の方に理があつたら勝つことはわかりきつてゐるんだからな」

「そんなことはないでせう、ぢやあ、もし投票で負けたら私は殴ぐられ損といふことになるんですか？」

「そんなことをおれが知るかい、喧嘩といふものは、お前、昔から兩成敗にきまつてゐるぢやねえか」

これ以上彼に物を言はせまいとする威壓的な視線に觸れると萱ノ波は胸がこみあげてきた。

思ひだしたやうに部屋へ行つてみても自分を見る同僚の眼の色がちがつてゐる。こつちから話しかけようとしても慌てゝ視線を外らして座を立つてゆく男たちを見るとうしろから怒鳴りつけたいやうな衝動に驅られたが、しかし自分に對する惡感情が部屋全體に流れてゐることを考へると急に手も足も出なくなつてしまふのであつた。もう部屋にゐる幕内力士で自分の味方と信じていゝのは三笠山と瀬戸泉の二人しかゐない。一體かういふ妙な結果になつた原因が何處にあるのか、——と考へれば考へるほど萱の波は情けない氣もちになつてきたのである。誰も彼も向つ腹を立てたが最後何をやりだすか知れない銀ノ森がおそろしくて堪らないのだ。若くして横綱になつた相模山はひと廻り先輩である銀ノ森からひと睨みされゝば、それだけで返す言葉がなくなつてしまふし、——いや、相模山だけではない。如月親方だつて銀ノ森には一目置いてゐるのだ。かうなつたらもうおれの面目は丸つぶれになつた上に、殴つた銀ノ森の方に正義があつたやうな途方もない結果になるかも知れぬ。いや知れぬどころではない、すでになりかけてゐるのである。萱嵐がそれとなく拾ひあつめてきた噂によると、銀ノ森の方には何時の間にか一つの理由が出來あがつてゐた。同じ部屋にゐる峯ノ松親方が去年、瀬戸ヶ島部屋に叛旗をひるがへして一黨をつくらうとしたときにひそかに參謀役をつとめてゐた銀ノ森が萱ノ波を誘つて友光、淺間岩の二人を傘下にあつめようとしたことがある。萱ノ波はそのとき勢に乘じて一時はすぐさま銀ノ森に加擔したが、間もなく考へ直して陰謀に參加することをやめてしまつた。銀ノ森はそのとき自分を裏切つた萱ノ波の態度に不快のかんじを抱いてゐたのである。それが彼の酒癖といつしよになつてだしぬけに現れたのだ。してみると、武士の情けを知らぬ男は銀ノ森ではなくて萱ノ波だといふことになる。——銀ノ森が殴つたのはよくないが、しかし、萱ノ波には殴られるだけの理由があるのだ。もしさうでなかつたら何故、殴つた銀ノ森に向つて殴り返さぬのか。それを表面だけの正義感を楯にして銀ノ森の處分を迫るなぞとはもつての

ほかである。

その話を聽くと萱ノ波は知らぬ間に對手のつくつた陷穽に落ちてゐる自分をかんじないではゐられなかつた。そこへ、久しく顏を見せない弟弟子の萱見川がひよつこりやつてきた。

「妙なことになりましたね」

「何が――？」

「何だか知らねえが、こんど、兄貴と銀ノ森關とを強制引退させることに話がきまつたさうぢやありませんか？」

「お前、何處で聽いてきた、――そんな話を？」

「花ノ浦に聽きましたがね、世の中の事はこんな風に動いてくるものですかねえ」

「誰がお前」

萱ノ波は片腕をさすりあげた。この二三日、銀ノ森に殴られた頭の傷痕に針で刺すやうな痛みを覺えるのである。「引退なんかするものか――」

「だけど、明後日の九段の興行番附には兄貴の名前も銀ノ森關の名前も出てゐませんぜ」

萱ノ波は唇を噛みしめたまゝ默つてしまつた。彼が來場所かぎりで引退するといふことは協會の下馬評にものぼつてゐた。來場所を一つ勤めれば協會の規定で、幕内十場所を保つてきた彼は一萬圓あまりの慰勞金が貰へる筈である。來年は四十一になるし、彼はいよいよ土俵をしりぞく時が來たと自分でも考へてゐたのである。

――しかし、それとこれとは話がちがふ。此處まで來たら、もう如月親方なぞを信頼して默つてゐるときぢやない。おれは大親方に談判して、その上でいざとなつたら力士稼業をふつつりやめるぞ。麥酒罎で殴られるのをぢつと我慢してゐた上に、同僚からは武士の情けを知らぬやつだと蔑まれ、これで强制引退と來たら世話はねえや、おれだつて男一匹だ、これでも五年間に關脇の榮位を二度も占めた萱ノ波でございます、と、どの面下げて道が歩けるかい――。

萱ノ波はせゝら笑ひながら立ちあがつた。まア、さう自棄にならないで、と心配